
東方平凡録

有夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方平凡録

【Nコード】

N0578T

【作者名】

有夢

【あらすじ】

朝起きたら知らない所で寝ていたのでとりあえずどうにかして帰ろうとしたけど色々問題が出てきた為に帰れないのでここでのんびりと生きていこうと思います……あれ、作文？

ぶろろーぐ（前書き）

駄文ですが、暇つぶしになればいいと思います

ぶろろーぐ

目が覚めたら知らない天井だったなんてことは普通ないはずだ。自宅の天井ではないし、家はどちらかといえば洋風の天井であったが、今見ている天井は洋風ではなく和風の木で出来た天井であった。

見たところ手入れがされてるうえに建てられてから結構たっているように見える。

周りを見ると和風の部屋で正面には障子、残りの三方向は襖と言う昔の日本家屋のようだった。

しかし、祖父母の家としては少しばかり違うように感じる。

色々と思うことはあるのだが、とりあえず一度整理してから行動に移ろうと考え、まず昨日のことを振り返ってみた。

朝、目覚しが鳴り響くと同時に止め、二度寝をしたりしてから起き、歯を磨き、朝食を食べ、長い道程を耐えながら学校に行き文句を思いつつ勉強し、弁当を食べ勉強し部活をしたりして、また同じ道程を引き帰しつつ寄り道なんかをしてから帰宅し、夕飯を食べ、勉強し、風呂に入り、ゲームや本を読んだりしてから寝る。

大体の学生は多分こんな生活であろう……家で勉強するかどうかが。

まあ、俺も大体こんな生活をしていたし昨日もこんな感じだったが、朝起きたらここで寝ていた。

自室で寝て、知らない所で目が覚めるといのは普通なくね。

どこぞの転生や憑依小説でもない限りないと思う……なってチートになりてーと何回か思ったりした事もあるが、それは昔のことであり、

俺の黒歴史の一つである。

とりあえず、ここはどこなのかを知っていたほうがいいと考えをまとめてから、

俺が今までいた布団をたたみ、正面の障子に手を掛けてその戸を開けた。

ぶろろーぐ（後書き）

この物語を読んでいたきありがとうございます
アドバイス、感想などがありましたらお願いします

1話 そこにあったのは（前書き）

特になし、されど駄文

1話 そこにあったのは

戸を開けたら庭が広がっていました。

：まあ、一家にも少しばかり庭はあると思うけど…広すぎじゃないかと思うような庭だった。

それと、兎を庭に放しているのだが良いのであろうか。かなりの数があるのだが大体見えてるだけで三、四十羽近くいるのだが餌や掃除は大丈夫なのかとどうでもよさそうな事を考えながら庭に近づいていくと、罨にありそうな紐に引っかかり何が起きるか警戒していたら、上からタライが落ちてきたのでそれに気づき前転でぎりぎり避けて着地した場所に落とし穴があり落ちた、普通に落ちたむしろベタだろと言うくらいにきれいに落ちた。

用意万端過ぎじゃないかと思う3m位の落とし穴の底から上を見ながら呟いていると人影と兎が近づいてこちらを見下ろしつつ、

「仕掛けたこつちがあきれる位にきれいに落ちたねえ」

と、兎耳を付けている(？)少女が人が気にしていることを言ってきたのでとりあえず言いたいことを言ってみた。

「えっと、なにその耳なんかのコスプレか？まずお前は誰だ。そしてここは何処だ」

と聞きたいことを聞いたら面倒くさそうに答えた。

「そつえば、お兄さんはここに間抜けな顔で気絶しながら運ばれてきていたなあ」

と人をバカにしたような顔でこちらを見ながら言葉を続けた。

「私は因幡てゐ。幸せを運ぶ因幡兎って所かな。そして此処は迷いの竹林の中にある永遠亭だね」

と答えた。それを聞いた俺は一つの事を思い出した。自他共に認めるオタクに近い悪友がやっていたゲームの一つであった場所だったと思う。確かそのゲームの名前は「東方Project」だったはずだ。そいつが何回も勧めてくるからやらされたゲームだったはずだ。なぜ、そのゲームの世界の中にいるのかと考えを深めながらいると、てゐ(?)が話しかけてきた。

「私の名前を言ったんだから、お兄さんの名前を教えてよ」

と言われても俺はなぜこの世界にいるのかこれからどうするかを考えることに集中していたので全く聞いていなかったことに気付いたてゐは先ほど避けておちていたタライを持って俺の頭に落とした。俺はその急激な痛みで集中が途切れ、痛みに苦しんみながらてゐを泣き目に近い目で睨みながら、

「いきなり何しやる!」

と叫ぶと向こうは

「こっちの話を聞かない罰ってことさ。頭が冷えてきたところでお兄さんの名前教えてよ」

と悪気も謝る気もなく言ってきたので、俺はそれにイラつきながらもこう言った。

「俺の名前は、ツキシロヒカリ月白光だ。」

今俺が分かっていることは此処では常識は通じないという事だけだ。

1話 そこにあったのは（後書き）

キャラの話し方が分からない

2話 今分かっていること(前書き)

今までのあらすじ

落とし穴から自己紹介

2話 今分かっていること

自己紹介をした後、てゐに妨害されながらも十数分かけてようやく落とし穴から出られた。

妨害の内容といつても登りきりそうなところで押すというやられるとかなり辛い妨害で、最後のほうは押す…じゃなくて突き落とすことに飽きて来たところで登りきれた。…今更だが落とし穴を作ったときの土は何処にやったのだろうか？

「それで？何で罫を仕掛けたんだ？」

と、状況が分かってきたところで罫について聞いてみた。

「別に、意味はないね。なんとなく面白そうだったし」

さらっと、答えが言われた。そのうえで理由も曖昧だった。酷くね、行動してる時になんとかで嫌がらせするとか。そういうええ、てゐがさつき言っていた事が頭に残っていたので聞いてみた。

「俺は何時から此処で寝ていたんだ」

と訊ねてみると意外な答えが返ってきた。

「今日の明朝に鈴仙が竹林の落とし穴で見つけてから運んできてここで寝ていたんだけど、全く覚えていないの？」

俺は全くと答えながら、なぜ羽毛布団の中から落とし穴の中にいた事について考えていた。一つ、何処かの小説のように召喚に近い近いことがおきて丁度下が落とし穴で落ちて気絶した。二つ、「八

雲紫」(そんな名前だったはずだ)という東方キャラによって連れてこられた。三つ、これらに関係なく神隠しに遭った。

可能性としては、一つ目はないな。勇者とかじゃないから俺はどちらかというと後方支援をするような人間だからな。二つ目は、ありえそうだな。会ったことも見たこともないけど、二次作品でよく幻想入りする時にいるけど俺の場合いたかどうか知らないけど。三つ目、これは二つ目よりは可能性は低いと思うがありがたい話ではないはずだ。此処に来たことは済んでいるからいいとして次の問題はどうかやって帰るかということだ。ここまで俺が考えをまとめていると離れたところから声が聞こえてきた。

「ちょっと、何でまた落とし穴があるの、てゐ！」

また兎耳少女が来た。兎との遭遇率高すぎじゃないかここという事を思いながら周りを見渡すとさっきまで居たはずのウサギ達がいなくなっている、一瞬でどこに行ったんだ。

「これで遊ぶ為に」

と、俺を指差しながらそう言った。待て、最初から俺を落とすつもりだったのかこいつ。

俺の心情とは裏腹に二人の会話は続いていたので、一応止めようとする為に二人の会話に介入する為にとあるキャラの一言を言ってみた。

「俺が、ガンダムだ!!」

…その一言を言った後は無言だった。ツツコミもなくただ無言だった。

ブレザーを着ている兎耳少女がその状況を破壊してくれた。

「…それで、もう起きていても大丈夫なの」

この空気を破壊した上で俺のことも聞いてくれた。この子いい子だよ、てみると比べたら月とスッポンくらいに性格の差があるよ。

「俺は、大丈夫だ。俺の名前は月白光だがお前の名前は？」

俺は答えてから名前を聞いてみた。

「私は、鈴仙・優曇華院・因幡です」

そう言つてそこで会話は終了した。

そこで俺は幻想郷のことを聞いて、外に出る方法を鈴仙に教えてもらった。てみると違うことを教えられそうな気がする。

教えてもらったことは、ここには妖怪などがいて危険であり、外から来る人間もたまにいるということと、外に帰る方法は二つあるらしく、一つは博麗神社から外に出る方法。二つ目は妖怪賢者によつて外に出る方法である。一つ目は、此处からだと少し遠いが基本的に外に出られるらしいが行くまでが危険である。二つ目は、確実に出られると思うが何時出れるか分からないらしい。

外に帰るのは無理じゃないか、いくらが武術などが使えるようとダメーじがなければ意味はなさそうだし…俺は全く使えないが。なので作戦は出会ったら即座に逃げるといふ事にしておこう。そんなことを考えていたら目の前で爆発が起きた。…なんでこの二人は驚いていないのであろうか聞いてみたらけっこうよくある事だそうだ。

俺がその事にあきれてつつ見ていると、流れ弾が俺に当たり俺が思ったことは周りを巻きこむなよということだった。

2話 今分かっていること（後書き）

流れ弾はあの二人です。

出来れば後2、3話永遠亭で頑張りたいです。

感想、アドバイスなどがありましたらよろしくお願いします。

3話 明かされた真実（前書き）

だんだんしゃべり方が変わってきた

今までのあらすじ

弾幕の流れ弾に当たりました

3話 明かされた真実

目が覚めたら何も見えず黒しかなかった。

小説でよくある転生テンプレかとか何かかと思っただが、顔に濡れタオルが掛けられていただけだった。それが分かりタオルを取って周りをしてみると、朝見た部屋であった。

何でまた此处で寝ていたのだろうかとかと記憶を掘り起こしていると、流れ弾に当たって気絶したということ思い出した。

それと、薄れていく意識の中で最後に見たのは周りにいた二人でも、撃ってきた二人でもなく庭の端っこにいた兎達だったような気がする。どこに行ったのか気になってはいたけど屋敷の方の端にいたのだと分かったが、塊魂のようになっていたがおもくないのだろうかなどと思っていると、

「あら、起きたの。思ってたより早く起きたわね」

その声を聞いて声のした方向を見ると正面にある障子を開けながら何かを載せたお盆を持っている鈴仙と赤と青の変わった服を着ている女性がいた。

「鈴仙と隣の人は…えっと、誰…ああ、大串さん？」

「違うわ」

一瞬された。

誰か知らないから言ったのにひどくないか。

「で、誰なんだあんた」

「私は八意永琳よ。一応医者と薬屋をしているのよ」

そう言いつつ鈴仙の持ってきたお盆から怪しい色をした液体が入ったビンをこちらに見せながら

「これを飲んでもらえるかしら」

それを見て俺の身が危ないと思いツツコミを入れた。

「飲めるか！そんな濃い紫色をした液体を飲める奴いないだろ！どう作ったらそんな色になるんだ」

「大丈夫よ。私が作ったのだから安心して飲めるわ。…試してないけど」ボツ

「今、聞かなかったほうがいい事聞こえたぞ」

「聞こえるように言ったのよ」

それをはっきり言う永琳に対し

「なにその嫌がらせ。俺に何か怨みでも有るのか？」

「特にないわ」

「もういいや。面倒くせえ…だからって飲ませようとするな」

俺は、薬(?)を飲ませようとする映倫に釘を打っておいた。

「意外と、ツツコミに向いているのようですね」

そう言いつつ、鈴仙はカルテかなにかに何かを書き込んでいく

「何の診断だそれは」

と、俺はさっきのやり取りに疲れて厭きれるようにして言った。

「後遺症がないかとか、調べてたんですけど、話を聞いていたら正しい」

「無駄話はいいからこれを飲みなさい」

そう言つてさっきの薬を永琳が結局飲ませようしているのですぐさま逃げようとしたら後ろから誰かに押さえつけられて動けなくなつた。しかも、押さえ方が立とうとしている所を座らせるのではなく、上から押さえつけるように押さええているから完全に動けない。

「誰なんだ。俺は今すぐ逃げたいんだが」

俺は焦らずにこう言つと

「まあまあ、そう言わずにさあ」

その声を聞いて俺は誰が押せているのか分かつた。
てゐた。あのイタズラ兔がまた仕掛けてきた。

「何でお前は俺を押せているんだ!!」

なんとか振り返りながら言おうとしたら永琳が薬を無理矢理口に押し込まれた為に中に入っていた薬が口の中に流れ込んできた。飲んでみた感想は、まず不味いということとそのうえ完全な液体ではな

く飲むヨーグルトみたいなイメージを持ってくれたら良い。だが、ヨーグルトのように滑らかではなく粉の溶けきっていない飲み物のようである。

飲んでからまた気絶しそうになった意識を何とか保ちつつ飲まされたものの正体を聞いた。

「何を飲ませた」

「なにつて、薬に決まって」
「どんな効果のかを聞きたいんだが」
「……」

俺が言葉をさえぎって言ったことに対して永琳は言葉を続けられずにいてためらった後に言い始めた。

「ならず、あなたは人間じゃないわ」

その一言は、俺の今までの有り方を変えていく一言だった。

3話 明かされた真実（後書き）

感想、アドバイスなどがありましたらよろしくお願いします

週末前には、投稿出来ればいいなと思います

4話 とりあえず特訓です（前書き）

今までのあらすじ

人じゃなかったそうです

4話 とりあえず特訓です

俺はそれを聞いた瞬間考えることをやめていた。けれど、頭の中は混乱どころではなかった。

俺は人間じゃない？ だったら俺は何なんだ？ ここは全てを受け入れる幻想郷なのだというのに俺は人じゃないというの受け入れられず此処に居なかった。

考えがまとまって来ては疑問が生まれてからまとまって疑問が生まれての繰り返しをしていて周りが何かを言い合っていた。俺は、一度考える事をやめて答えを聞く事にした。

「なら、俺はいつたい何なんだ」

「結構動揺してると思ったけど大丈夫そうね」

「そう見えないだけでかなり動揺しているぞ」

俺はそう言いつつ永琳の方に顔を向けた。

「そう。あなたは人であって人でないものよ。精確に言えば半人：半魔に近いものかしら。：人じゃないことは分かっていたけど分かっていたなかったからこそあの薬を飲んでもらったけど」

少し考えつつ永琳は言葉を発しつつ俺に飲ませた薬が入っていたビンを持ちつつ言葉をつないだ。

「まあ、あなたの場合人から変わっていったような感じなのよ。前に、死に掛けた事とかあったかしら？」

俺は今言われたことで昔に遭った事故のことを思い出した。

確かあれば、小二位の時に帰り道で寄った駄菓子屋から家に帰るために大通りに行かないと行けなかったので買ったお菓子を食べながら横断歩道を歩いていると信号を無視して突っ込んできた車に引かれて三ヶ月くらいの重傷を一ヶ月以内に直ったこと。それから、回復力や運動能力が上がったこと。

俺がそのあたりが原因なのだろうかと考えていると永琳が

「思い当たる事があるようね」

と言ってきたので俺はそれに頷いてから昔遭った事故について話すと永琳はなぜか考え始めた。

鈴仙やてゐは話についていけない様だが俺もついていけない。

今までの情報を合わせてみると、俺は人と魔族のハーフらしくそのせいで能力が上がっていた。その力が大きかったので幻想入りしたのかもしれない。

俺が軽くまとめ終わってから永琳に治療（？）も終わったからもう行くぞと言うと

「だったら、ここで特訓していったらどうかしら」

永琳がそう言うのと周りの二人も便乗するようにそれに賛同してきて成り行きでここで特訓することになった。どのような事をするのか聞くと、まず霊力などを使えるようにしてから弾幕を張れるようにしてから実戦をするそうだ。

とりあえず、霊力を使えるようにするらしく、方法としては体の中

に流れているものを見つけるか、他の人から霊力を流して自覚するかのもどちらかららしい。幻想郷にいる奴らはほとんど前者の方らしいので俺もその方法でやることになった。

「まず、血以外で体の中で流れているものを見つけてください」

鈴仙がこの特訓に付き合うことになってそのアドバイスを聞いて適当な返事を返しながら意識を自分の内側に潜っていくと…見つけた俺は、霊力と思われるもの見つけて意識を浮上させ目を開き鈴仙に見つけたものを手の平に出して訊ねた。

「これが霊力か？」

「そうですね、まだ始めてから三十分位で見つけられるものなんですか」

「俺が知るわけないだろう」

と、少しばかりあきれながらその問いに答えてから作った霊力球の密度や大きさを変えようとしたが出来ないのでどうやれば出来るか聞いてみたら、

「撃つときに決めてるから難しいかもしれない」

考えながらそう言った。なので、一度消してから密度を上げてと大きさを蹴鞠くらいのを作ろうとしたが耐え切れずに露散した。この大きさを密度をどこまで上げるか試していると十数回で露散しなくなったのが出来たが、処理をどうしようかと考えていたが面倒になったので天空に向かって蹴り飛ばそうとしたけど球技の才能がなく投げ蹴るといった事が下手でまっすぐ蹴ろうとしても斜めに飛んで

いたりする。

なので空に向かって蹴ったはずの霊力蹴鞠が違う方向である屋敷の廊下を歩いている人の頭に当たっても不思議ではなかった。鈴仙は誰に当たったのか分かったらしく驚きながら言った。

「今、当たった人は姫様なんですよ！」

……え？姫なんて居たんだ。と思いつつ気絶した姫（仮）を永琳の所に運んだ。

4話 とりあえず特訓です（後書き）

グダグダだ、ああグダグダだ、グダグダだ。ということで駄文です。テスト前に書いている有夢です。

作業用BGMを聞きながら書いているとかなり進みません。十時位から書き始めたのに。

感想、アドバイスなどありましたらよろしく願います

5話 蓬萊の姫（前書き）

駄文です…とりあえずやってみたことがあります

今までのあらすじ

霊弾が誰かに当たった

5話 蓬萊の姫

あの後、光と鈴仙は光の蹴った流れ蹴鞠ではなく、流れ霊球に当たり気絶した姫（仮）を永琳のところに運んでいた。運ぶといつても背負っているのではなく引きずっている。鈴仙や庭に居る兎もなにも言わない事からカリスマはないのだろう。光は姫（仮）の足を持つて引きずって移動していた。

鈴仙はどこに永琳が居るのかを能力で分かつて居る為、光の前を走っていた。光はそれに対して「聴覚が優れているからだな」と鈴仙の能力『狂気を操る程度の能力』を知らずにいる為に見当違いの答えを出していた。

そのまま、庭から真逆の方にある部屋の前で鈴仙が止まったので光もそれにあわせて止まり、引きずっていたものを一度落としてからその部屋の戸を開けた。開け放った戸の向こう側にいた永琳とてゐはポーカーをしてお互いの手札を見せていながら急に開いた戸……つまり光達の方を見ていた。

光達に対しその二人は急に戸を開けたことを怒り始めたために戸惑っていた。一通りの文句を聞き流した後、特訓中に作った霊弾に当たって気絶した姫（仮）について話すと永琳は放置していても大丈夫だったと言った。光はそれを疑問と思い聞いてみると不老不死だからと言われ幻想郷はどうなっているのか気になったが頭の奥にしまい込んだ。

光は、魔族（？）の特徴を知っていないか聞くとそこに居た三人は思い出しながら、頑丈、回復が早い、魔力が使える、死にくい、といったどこぞのデビルハンターのような特徴を言われた。

そこから、光達は姫（仮）を放置して大富豪を始め六回ほどやっている姫（仮）が起きたので終了した。結果はビリの数だと光、鈴

仙、てゐ、永琳の順だった。能力や経験がものを言うのだろうか。

姫（仮）はどこに居るのか周りを見渡してみても分かり、そこに霊弾をぶつけた本人が居た為に光の前まで行き当てられた文句を言い始めたが光は何食わぬ顔で考え事をしていた…どうすればあの三人に勝てるのかを考えていた為、返事を問われても適当に返していたが、それなりに相手の怒りを買わない程度の返事であった。そのやり取りを見ていた三人は姫（輝夜）は流されてるなあと思いつついた。

そんなことを考えているとは知らずに姫（仮）の話が長いために光はうんざりした顔で話を終わらせて誰なのかを聞くと姫（仮）は蓬萊山輝夜と名乗り自分は姫だと言っていたので光は三人の方を向くと全員が頷いて肯定していたので光は姫（仮）を姫（笑）に直してから自分の名前を名乗り終えた。

が、かぐやという名前と永琳から聞いた不老不死ということから竹取物語のかぐやと同一人物であるのだらうと考えそれを知っている永琳はそれより前から生きてい…んと思っていると光を睨んでいる永琳が怖くなつた為考えないようにした。

光は永琳に霊力を扱えるようになったと報告をすると永琳の方は空は飛べるのかと言って来た為、否と返すと飛べるようにと言われたので霊力で飛べるのかを兎の二人に聞くと飛べると返ってきたので飛べるのかと思いつつ来た道を戻り特訓を再開しようとする夕食時だから今日は終了といわれた。

その後の事は、夕食の手伝いをしてからそこに居た全員で夕食を食べ、風呂に最後に入り、今朝方寝ていた部屋でまた布団を引いて今日のことを思い返しつついると睡魔がやって来たため睡魔に身を任せ眠りについた。別の場所から誰かに見られているとはいざ知らずに。

5話 蓬萊の姫（後書き）

ということで三人称でやってみました。これであってあるかなあ…
ものすごく不安です。

1500よりなかなか文量が増やせないのはやはり下手だからだろうか。

こんな駄文で感想、アドバイスなどがありましたらよろしく願います。

6話 特訓と能力と何かと（前書き）

駄文なのです。

いままでのあらすじ

飛ぶ為の特訓を始めました

6話 特訓と能力と何かと

俺は、いつも通り六時過ぎに起きたがどことなく何かがいっつもと違うと感じた。何が違うように感じていたが何が違うとははっきりとは分かっていなかったが、だんだん眠気が無くなつて行くにつれてここが何処なのかがはっきりした。

ようやく働き始めた脳を動かして、昨日から此処にいたという事を思い出してから布団をたたみ昨日借りた寝間着から私服に着替えて部屋から出た。

俺は昨日通った道を思い出しながら居間の方へ行こうとしたが、庭が見えない内側に在るため何処がそうなのか分からなかった為てゐに会うまで行けないのではないかと思った。

「なあ、空を飛ぶ方法ってなんだ？」

「さあ、考えたこともないから知らないね」

そう言いながら俺とてゐは居間の方へ歩いて行つた。

居間に着くともう既に朝食の用意がされていた。ちなみに、永遠亭はほぼ日本食：つまり和食が主である永遠亭だけではなく幻想郷のほとんどなのだろうが。

俺は、てゐにも聞いた飛ぶ方法を聞いてみると、

「考えたことはないですね。ほとんど最初から飛べてましたし」

…飛ぶ方法って感なのだろうか、それ以外の方法はと考えているといつの間にか食べ始めていたので俺も追いかける様に食べた。途中

でてゐに焼き魚を取られそうになったが…

食べ終わった後皿洗いの手伝いをしてから庭に行き飛べるようにイメージしたりしたが全く出来そうにない。それを見ていた鈴仙とてゐは靈力をまとつてないと言ひ始めた。

…先に言えよ。それが飛ぶ方法ではないだろうかと思ひつつその話を聞いていた。

三十分位の話を聞き終わり教わつた方法で再びやってみたがまったく飛べる氣配がない。

そこから、話し合っていると結果的に體質の問題であるということに片付いた。

ならば、他の方法でやるしかないということで実験…ではなく特訓の始まつた。

特訓一 靈力で障壁を作つてその上に乗る

「本当に出来るんだろうな」

光は、疑問を持ちながら発案者の鈴仙に聞いた。

「しつかり作れば大丈夫です…たぶん」

「なんか最後言つた？」

「言つてませんよ」

光は自分の前に平行な壁を作りそれを自分の手で触れるかどうか試

すと触ることが出来たので今度は自分から垂直な壁を膝の高さくらいに作って飛び乗って見たら一秒経つか経たないかのタイミングで壊れたので使えるけど時間的な余裕がないということはどうするか話し合った結果、厚さを増やす、枚数を増やすなどの案が出たので試してみたがどれもあまり良い結果が出なかった為、緊急回避ようにしておく事にした。

特訓二 道具を使って飛ぶ

「道具ってどんなのだ？」

「例えば、魔法使いの箒とかさ」

光は、よくある黒い魔法使いが箒に乗っているところをイメージしたら、魔法使いが何処かの図書館から本を強奪していくようなイメージが出来たのでスルーしてから答えた。

「確かに、そんなイメージはあるな。けど、あれはどうやって飛んでいるんだ」

「知らないけど、大体似たような方法でしょう」

俺は思ったことをそのまま言った

「適当だな」

「御託はいいからまずやる」

光はそれに適当に答えてから、箒が何処にあるのか鈴仙に聞くと

「庭のどこかにあると思うけど」

光はその曖昧な答えを聞いてから箒を探しに行った。

箒を探すために庭を歩き続けると箒があったが罨のような雰囲気を出してある所にあつた。なので大回りしてから箒を取って靈力を箒に纏わせてから飛ぶイメージを持って空に駆け出そうとしたが箒が飛ばない為にそのまま重力に従い、避けておいた罨：落とし穴に落ちた。落ちた底からどうにか飛ばうと何回か挑戦したが飛ばなかつたので箒を持って落とし穴をよじ登った。

「無理でしたか」

「無理だつたな」

光は鈴仙から聞かれたことをはっきり言った。

「そこまではっきりと言えることですか」

「はっきり言えるな」

とすぐに返した。

特訓三 能力を使って飛ぶ方法

「能力ってなんなんだ」

「能力はその人が持っている力ですね」

「なら鈴仙も持っているのか」

「はい。けど持っていない人もいます」

もし光に能力がなかったらどうするつもりであろうか。

「はあ。…それで、能力を使うにはどうすればいいんだ」

「なんかこう、パツと思い浮かぶらしいですよ」

光は、あきれつつも目を閉じて能力を思い浮かべた……あれなくね……いや、あった。

目を開けてから鈴仙に対して能力を言った

「『座標を操る程度能力』だそうだ」

「それで何が出来るんですか？グラフとか？」

「俺に聞くな」

その後、とりあえず何が出来るかを確かめていくと、まず、自分の位置を動かすことが出来る。物を動かすといった移動系の能力であった。この能力を使ってなんとか飛べるようになったのは能力が分かってから三日後であった。

6話 特訓と能力と何かと（後書き）

駄文です。大事なことから前後書きに書きました。

テスト中だけやってしまった。

反省はしないけど後悔はある。

感想、アドバイスなどがありましたらよろしく願います

7話 弾幕ごっこ？ (前書き)

弾幕は今回は出てきません。
すみません。

いままでのあらすじ

空を跳べる様になった

能力が分かった

7話 弾幕ごっこ？

俺が、能力を使った飛行が出来るようになったのは、能力が分か
ってから三日経った後なのだがこの能力の特徴は『点』と『線』を
使うことであり、数値も動かすこともある。

俺の『座標を操る程度の能力』は『線』があり、そこからaという
『点』からbという『点』に動かすことがこの能力の本質にあたる
のである。例えるのなら、とあるシリーズの空間移動テレポートと座標移動ムーブポイントと
似たことができる能力であり、四次元を使った物の出し入れが出来る
ことも特徴の一つだ。

先に言ったaからbに動かすことはステータスつまり出せる力を
変えることが出来る。簡単に言えば、グラフで表せるものは基本的
に操ることが出来る。

この本質と思うものを見つけたのは、俺がこの能力を使って飛べ
るようになる少し前で『点』から『点』に動く距離を短くしたり『
点』を固定すれば飛べるのではないかと思っていたが、俺の場合飛
ぶことより、跳ぶ方が俺にはあっていた。

なぜなら前回靈力で作った足場を能力で固定して使ったほうが移
動しやすいからだ。

足場は出来るけど靈力じゃなくても作れ「いつまで、考え事し
てるつもりなのかなあ」…現実逃避くらいしたっていいだろう。

飛ぶではなく、跳べるようになった後日：つまり今日なのだが今
は昼過ぎなので今日の朝、朝食を食べ終わり片付けをしている時に
「弾幕ごっこをしないのか」という疑問が出てきて聞いてみたら「
スペルカードを持ってないから」という答えが返ってきたことから
スペルカードを作ることになったのである。

スぺルカード…簡単にまとめると必殺技のようなものであるらしい。弾幕ごっこをするには必要なものらしいので作ることになったがなかなか上手くいかないのである。理由としては、真似しすぎているからだ。どのスぺルもどこかで見たことがあるようなものである。なぜならスぺルと聞いてほとんどない東方の知識から似せて作っていたのだから。

そのため、永遠亭の人々が光のスぺルのほとんどを改造もしくは作り方を教え込んだ。

そのため何枚かできたので、試し撃ちつまり弾幕ごっこをすることになり何回かやっているのだが、一勝も出来ていないのだった。回想終わり。

スぺルも使っているのだがやはりというか作り方を教えたたりしていた為ほとんど避けられてしまうのだ。

「何で勝てないんだ？」

俺がそう呟きながら座って空を見ていると

「相手の弾幕を見てないからじゃないかなあ」

と、後ろからさっきまで俺の相手をしていた、てゐがそう言った。

「見てないことはないと思うぞ」

俺は空を見たまま答えた。

「見てるのは近くにある当たりそうなのだけじゃないかなあ」

たしかにその通りだが、どうやって見える範囲より奥にあるのにどう気付けというんだ。

「それに、弾幕には必ず抜け道があるし」

「そういうものなのか？」

「じゃないと、ほとんど勝てないでしょ」

「それもそうだな」

俺はそう言いながら立ち上がった後気付いた。

「輝夜はどこに行ったんだ？」

周りを見渡してもさっきまで（弾幕ごっこ終了時）いたんだがいなくなっている。

「姫様なら遊びに行ったわよ」

俺の独り言に永琳が答えた。

「あんな友達のいなさそうな奴がどこに遊びに行けるんだ？」

俺が思ったことをそのまま言つと、苦笑しながら永琳は

「もう一人の蓬莱人…不老不死のところよ」

俺はそれを聞いて幻想郷こいの住人は何でもありだなと思いながら弾幕

ごっこをする為に空へ跳んだ。

7話 弾幕ごっこ？（後書き）

次回は弾幕から始めます。

出来るだけ、文章を増やしたり、会話や地の文を増やした方が良いのか出来るだけ聞きたいので、感想、アドバイスなどがありましたらよろしく願います。

8話 弾幕ごっこ(前書き)

いままでのあらすじ

スぺルカードつくりました

8話 弾幕ごっこ

弾幕ごっこそれは幻想郷で定められているスペルカードルールを使っている遊びで、妖怪と人が戦う為の最大限のラインでもある。なぜなら、元からの力が違うというところがあるからだろう。

「やっぱ無理だろこれ」

俺はそう言いながら迫り来る弾幕を出来るだけ速く避けられる場所を見つけ出して今いる足場からそこまで跳んで移動しながら弾幕を撃つ。しかし、てめにとつては俺の撃つ弾幕は簡単に避けられるらしくわざとらしく弾幕に対して大きく避けている。俺はそれに合わせて避けた先に弾幕を放った。

「うわっ！ちよつと危なかったよ」

「そいつはどうも」

軽く口を返しながらも俺は出来るだけ弾幕の数を増やしているが、てめに弾幕を撃ち込んだがやはり経験に差があるためか簡単に避けられているが、こちらでも避ける為の移動を徐々に大きく避けなくても避けられるようになってきた。

「そろそろ当たりなよ」

そう言いつつスペルの用意を始めたため俺は避けられるように集中し始めたらてめはスペルを宣言した。

「『兔符』開運大紋」

その言葉を言うが早いかさつきより多くの色取り取りの弾幕が迫ってきた。

俺はその弾幕を避ける為に出来るだけ全弾見える上空の方に方へ跳びながらなんとかてゐが見える隙間から撃つがほとんど避けられる為に俺はスペルの時間切れを狙った。

「時間切れを狙ってるならさせないよ」

てゐは俺の狙いが分かったのかそう言いながらさつきまでと移動する場所を変えたり速度を変えたりして弾幕の流れを変えてきた。そのため、急に変わった流れについて行けずに弾幕に当たりそうになった俺は、スペルを使った。

「『守符』反転返し」

スペル宣言をした後俺の周りにシールドビットのような物が十個近く浮いていて弾幕が俺に当たる前に防ぎ当たった弾幕が撃った本人の元に直線的に弾幕を返すスペルなのだが、防御用な為耐久時間が長く一個でもビットが残っている限り時間切れ以外でこのスペルは終了しないのが特徴になっている。

スペルカードルールには全て破られると負けになるので多くのスペルを持っている人もいるが、枚数を限定しておく事もある。

俺もてゐも事前に二枚に限定したので残り一枚しかない。

残りの一枚を使わせたうえで使い切らせれば勝ちなのだが、てゐの弾幕がさつきのよりも多くなっているので俺は反撃できずにいた。

普段からこいつらどう避けているんだ。

俺は霊力が残りが少なくなってきたため、てゐに向かって突っ込みながらスペルを宣言した。

「『刻限』三拍」

このスペルは相手を普段より移動速度を遅く感じるように『点』をずらし、暗幕の速度を遅くする事で弾幕を当てやすくすることが特徴になっているが、三拍叩いた音が無くなるまでの短い時間までという制限が変化するスペルでもある。

俺は、時間内にてゐに接近して弾幕を撃つたらスペルの時間切れで避けられた為に弾幕当てられて落とされた。ちくしょうめ…

8話 弾幕ごっこ（後書き）

感想、アドバイスなどありましたらよろしく願いします

9話 ラジオ放送第一回（前書き）

いままでのあらすじ

弾幕ごっこで負けました

9話 ラジオ放送第一回

弾幕ごっこで何回も落とされていると気絶から目覚める時間も早くなるのだが、俺の場合は半人半魔なので気絶から回復しやすいのですぐに起きるのだが目が覚めたら…

ラジオの収録場のような所にいました。

「えーっと、ただ今より第一回幻想郷オールナイト全時空in永遠亭を放送するわ」

そう輝夜が宣言した。

「何、これ」

俺はそれしか言えなかった。

輝夜「さあ、やってまいりました。幻想郷オールナイト全時空in永遠亭」

光「このラジオもどき聞いている奴いるのか」

輝夜「この放送は、八雲家の提供でお送りしています」

光「言葉のキャッチボールをしないのか？このラジオは」

永琳「姫様が無視するのは結構前からで、このラジオも思い付きから始まったんだから諦めた方がいいわよ」

てゐ「このラジオは此処以外でもやるから」

光「おい、それはどういう意味なんだ、てゐ。それと八雲家って誰の家だ」

鈴仙「八雲家は八雲紫と八雲藍のことだと思うけど」

輝夜「まあ、別に提供がなくても放送は出来るんだけどね。能力と使って」

光「まったくもって、無駄使いだな。後、何を放送するつもりだこのラジオ」

てゐ「今回は、一応主人公もどきの光さんの自己紹介らしいよ」

永琳「予想以上に扱いが酷いわよね。主人公？なのに」

輝夜「そんな事はおいておいて、進めるわよ」

永遠亭メンバー「了解です」

光「俺の扱い酷くないか」

酷くないです。こうでもしないとダブったりしそうですし

光「なんだ今の電波」

鈴仙「狂った人はほっときながら進めましょう」

てゐ「じゃあ、とりあえず

見た目は碧○学園生徒会議事録の副会長みたいで違いは副会長より髪が白くなっている。

能力は『座標を操る程度の能力』で特徴が点から点への移動だったけ？

以上、それ以外特になし。…あと、半人半魔という種族で特徴はなんだっけ？」

永琳「特徴は、人より頑丈で回復が早いとかね」

光「補足としては魔力が使える」

輝夜「けど、全くそんな設定は使われていないのよね。作者がダメだから」

鈴仙「次は、このラジオに関してです。このラジオもどきは大体九話くらい間をおいてやります。

理由はそうしないと、文字数を増やすというのもこの目的に入っているからですね。」

光「基本的な内容はどうするんだ」

てゐ「碧陽学園のラジオみたいにするつもりだっさ。だから基本的には喋ってるだけで、

感想とかお便りみたいのがあればそれを使うらしい」

永琳「カンペ見ながら言わなくても良いんじゃないかしら」

光「結局の所、多段の穴埋めみたいなのか」

輝夜「東方って意外と進めにくいよね。原作：つまり異変は気づかなかつたりするし」

鈴仙「今回はこれといったものもないので終わりにします。また次回（？）」

光「これ毎回此処でやるの？」

てゐ「いろんな所でやるらしいよ、これ」

永琳「悪いけどこの機材片付けておいてね、男子」

光「俺だけで？あ…無言で立ち去るな…おい！」

9話 ラジオ放送第一回（後書き）

…これは、9が付く話か9の倍数のどちらかでしたいです。グダグダですけどこれからもよろしく願います。

感想、文句、アドバイスなどありましたら文句以外は出来るだけよろしく願います。

10話 お片付け（前書き）

いままでのあらすじ

第一回ラジオ放送開始

10話 お片付け

俺は前回行われたラジオの片付けを一人で行っているのだがやはりなかなか終わらない。理由は、どこにあったのかが分からないのだ。まず此処がどこなのかを知ろうとして部屋から出て周りを見渡してみると今までいた部屋の入り口に【ラジオ放送室】と書かれていた。…別に片付けなくても良いのではないだろうかと考えつつ部屋に戻り片付けを再開した。

あのぐだぐだラジオをしていた時には気付かなかったがこの部屋の奥は物が散乱していた。永琳はこれを片付けろという意味で言ったのだろうか。しかし、見えるだけでもラジオ放送と関係のない物まであるのだが…。何もしてないより何かした方がいいので片付け…もとい掃除を開始した。

まず、下にあるものより自分より少し高い所にあるものの方が小さかったりするので安全に取り出せると思っていたのだが予想以上に変な物が多かった。

俺は、山に成っている物から適当に取って能力を使って庭の方に分けておこうと思っていたが、最初に取ったものが「…ジャス○ウエイ？」いや…これあれじゃん、衝撃加えたら爆発すんじゃないかった？なので天空に向かって出来るだけ真直ぐに投げて即座に零弾を撃ち込むと爆発した。俺は、その爆発を見届けると片付けを再開した。

次に、取ったのが「…ど…ど〇い…さんだと」あの終盤で泣ける某良作に出てくる癒し(?)系のカタカナ言葉を話し、某乱闘ゲームにも出てくる人気(?)キャラクターだ。…作者はけっこう好きだが。とりあえずこれはこのまま放っておこう。勝手に動くし。

次に取ったのは、「日本昔話？」しかも何回も読まれた形跡がある。俺は一度作業を止めてど〇いさんを抱きながらラジオをしている時に座っていた椅子に座って読んでいるとかぐや姫…つまり竹取物語の部分だけ変に線で消されていたりしていた。内容を思い出しながらいると月や求婚に関係していたりする所だった。そこから俺は、ここに住んでいる蓬萊の姫様（笑）がやったという結論を出して本とど〇いさんを机に置いてまた再開し始めたがこのペースだといつまで経っても終わらないような気がしてきた。

ただでさえ此処には多くの物が放置されている為それを確認しながらやっているので余計に終わらない。それに、ジャス〇ウェイを爆発させても誰も来ないのはよくあるからなのだろうか？早く終わらせる為に俺は、能力を使って体感時間を早めて片付けを続けた。片付けをしている間にも色々なものがあつた。例えば、バイクに乗る古代戦士のベルトとか欲望の塊のメダルとか、少しばかり所かけっこう昔にあつた物が放置されていた…これがあるという事は未確認生命体や欲望の王が何処かに居そうでしょうがない。

此処の名前に基づいているのかどれも読み漁った本以外はほとんど新品の様に新しかった。

散乱していた物の片付けがほぼ終わり…と言っても、単純に整理しただけなんだけど…

片付け…もとい整理が終わわり俺は部屋から開けたままの戸を見ながら訓練でもしようかと考えながら庭に出ると上空の方から弾幕の流れ弾が降ってきた。前回…結構前にこの手の流れ弾に当たったが今は能力を無駄に使い避けながら更に見つけたジャス〇ウェイを能力で手元に持ってきて上空にいる二人の次の移動地点になる所に移動させて爆発させた。

その爆発に巻き込まれた二人は墜落せずにその場に止まりながらこちらの方…俺を邪魔な物を見るように睨みつけていた。

10話 お片付け（後書き）

感想、アドバイスなどありましたらよろしく願います

11話 蓬萊の不死鳥（前書き）

出てきて少し喋ってるくらいです

いままであらずじ

ジャスタウェイを投げつけました

11話 蓬莱の不死鳥

こちらを睨んでいた二人の内の姫（笑）ではなくもう一人の銀色：けどどちらかといえば白い色をした見た目では少女：けど幻想郷に居るといえるうえで普通であるわけがない。例えば、姫（笑）とやり合ってるから死ににくい妖怪に近いのだろうと思う。考えていた事を頭の奥に放り込んでから流れ弾が当たりそうになったことに文句を言う為に俺は口を開いた。

「おい： お前らの弾 m「いきなり何するんだ！」「俺の話聞けよ」この場合俺にも非は有るのだろうが前回当てられている：では無く被害にあつたのでここで引かないようにしながら

「お前らが何処で弾幕ごっこをしてもいいが周 r「うるさい燃やすぞ」すいませんでした」

プライド？ 決意？ 何それどう使えばいいの？ 作者の作った曖昧すぎる設定なんて使っても灰か消し炭になったら死ぬよ、俺。

「そういえば、どこかで見たような気がするけど、何処で見たっけ？」

「お前らの流れ弾に当たって気絶したんだよ俺は」

それを聞いて漫画で思い出したときによくある手を叩いてから

「ああ、思い出した、あの時爆発した奴か」

「えっ：俺、爆発したの」

そう呟いてから、輝夜の方に目を向けると視線に気付いたのか俺に對して頷いている。

ここで、俺は最近どのくらいの頻度で死に掛けているのだろうか。暇な奴が居たらぜひ数えてもらいたいね。：俺が覚えているので六回近くだ。さっき聞いた流れ弾と弾幕ごっここの始めのほうで。終えは本来の目的である家の安全のために会話を進める。輝夜は死なないからいいだろうし。

「なあ、あんた達が何処で弾幕ごっこをやろうがいいが一つだけ承

諾してもらいたいことがある」

「ん、なんだ？」

「それはだな、周りに出来るだけ被害を出さない事だな」

俺がそれを言うと一緒に器用に空中でこけた。

「そこは私の心配とかするんじゃないの？」

輝夜だった。俺はその問いに対して

「そんな事する訳無いだろう。お前の心配するくらいなら日本の少子化を心配する位だぞ。よかったな信用されていて（笑）」

「してないわよねえ」

そんな感じで輝夜を弄ってからもう一人の方に向き直った。

「それでどうするんだ？」

「もし、それを拒否したらどうなるんだい？」

「どうもならないぞ」

「はあ？」

俺の答えを予想して無かったようで少しばかり呆れている様な感じの声が返ってきた。

「いや。だから俺はどうしようもないって言ったんだ。なんせ、俺は弾幕ごっこが苦手だからな」

自分を嘲笑うかのように言うと言ったことに対してさすがにそこまですぐに言える自分が少し嫌になったけど。俺が鬱になっていると、

「そつえば、あんたの名前を聞いてないけど」

そう聞かれたので俺は鬱の状態で答えた。

「一応、半人半魔の月白光だ。あんたの方も名乗ってないが」

「ああ、そうだったね。私は健康マニアのただの焼き鳥屋だよ」

「人に名乗らせておいてそれは無いだろう。だから、しっかり言うのが礼儀じゃないのか」

「そうかい。なら、私は藤原妹紅。蓬莱人だ」

此処には、チートしか居ないのだろうか？

11話 蓬萊の不死鳥（後書き）

戦闘は特になしで行こうと思います。戦闘描写が苦手ですし、etc、etc

苦手なものが大量にある有夢です。この先、大丈夫かと言いたくなる位です。Ort

まあ、感想などがありましたらよろしくお願いします。

12話 人里へ…されど違う場所（前書き）

今までのあらすじ

焼き鳥屋と出会いました

12話 人里へ…されど違う場所

此処には長寿か不死しか居ないのだろうか。居ないからの『永遠亭』なのだろうけど…この場合此処に居る兎はどうなのだろうか。月産か地球産かそこが問題だ。もし、月と地球のハーフ兎が居たらどういう風になっているのだろうか…それ以前にどう違うのだろうか知らないから見分けが付かない。俺がそんな事に悩んでいると、妹紅が「何で、あんたは此処に被害が行かないように言ったの？」
「だってさあ、お前らの弾幕の流れ弾があっちこっちに行くからそれを出来るだけ抑えて欲しいと思うわけ…けど、あれはどうなってもいいと思う」

「ねえ、だからそれ酷くない？」

あれ扱いされた輝夜は話に割り込んできた。

「「酷くない」」

「何で二人揃って言えるの」

そんな感じで俺と妹紅は即座に否定しておいた。

「それより、何で今まであそこ…放送室に居たの？」

「何でって…片付けの為だろう」

「え…そうなの」

「あんまり三点リーダを使うと飽きられるぞ」

妹紅がかなりメタな所を突いてきた。

「そんなことを言われても作者が駄目だからだと言えないのだが」

「何の話をしている訳？」

「「分からないなら話に入ってくるな!!」」

「やっぱり、酷い！」

メタな話が分からない時は出来るだけ話に入って来ない方が安全である。絶対に話を通じない時や言っていることが分からない事が出てきたらスルーしておいた方が懸命である。理由は無いが…

閑話休題

「そういえば、俺はそろそろ此処から出ようと思うのだが」

俺は思い出したかのようにその事を縁側でのんびりしていた永遠亭のメンバーに言った。

「とりあえず、何でもそう思ったか聞いておこうかしら」

「一応、ある程度弾幕ごっこも出来るようになったし、何時までも此処で世話になる訳にもいかないからな」

「別に此処に居ても良いと思うけど、弄r…遊び相手がいて」

てゐがさらつと本音を言った事に気にしないで、別に許可が無くてもいいけどなと付け加えておいた。

「別にいいんじゃない。あなたが決めた事だし、さっき言ったように別に許可が要るわけじゃないし」

予想以上にあつさり言うものだから俺の方が啞然とした。それ以前に輝夜が此処の主だから輝夜が決めるんじゃないのか？

「変な顔をしてるわよ」

「ん…ああ」

輝夜じゃなくて永琳に言われると逆に辛いと思うのは俺だけだろうか。

「それより鈴仙そろそろ喋ったらどうだ？居るのに居ないように扱われるぞ」

俺がそう言つと鈴仙は噴火した火山のように喋り始めた。

「喋る所を出せないのは作者がキャラの喋り方を理解しきれていないからであつて居るから何処かで喋っておかないと空気になったりしてしまう事を分かつておきながら進めていますしこうやって私がつたんと喋っているのも能力を使った電p「ごめん、もう…良いや」…そうですね」

俺は、自分から鈴仙にメタな墓穴を掘らせてしまった事を反省はしてるが後悔はしていない。反省も余りしていないのだが。

「それで何処に行こうとしているのよ」

「とりあえず、人里に行ってみようと思う」

さっきの事から回復した鈴仙が聞いてきたので大体決まっていた行き先の人里に行くことにした…何より安全が確保されてもいるからというのが一番の理由だ。

「それだったら焼き鳥屋に頼るか、鈴仙と一緒に行くか、てゐの能力を使っていくか。さあ、どれ？」

「チェンジで」

輝夜が意味の分かりそうで分からない事を言ってきたので即座に変えてみたら、体育座りで拗ねた。

「まあ、迷いの竹林から出るんだったら道を知っている誰かと一緒に行ったほうが良いわね」

「いや別に、方角さえ言ってくれば能力で竹林から出られるのだが…」

それを言うと、全員が俺の能力を思い出したらしい。…ひでえ。

その後、どういう訳か全員と連続で弾幕ごっこをする破目に成り四銭一勝した…勝ったのは輝夜で偶然的にスペルを落とした所に攻撃を仕掛けたのだったが。

そんなこんなで永遠亭から人里を目指していたのだが、目の前には霧で包まれた場所に今居るのだった。

どうしよう…

12話 人里へ…されど違う場所（後書き）

お気に入りとしてこの小説が入っている事にまず驚きました。と、
言っても暇つぶしに読める駄文なのですけど…それは置いておいて、
ありがとうございます。

感想などありましたらよろしく願います。

13話 脇巫k…最後までだけど 結局、回想（前書き）

いままでのあらすじ

道に迷いました

13話 脇巫k：最後だけだけど 結局、回想

人里に行こうとしたら全く別の場所に居た。まあ、とりあえず場所を確認したいのだが、霧が在るためよく見えない。俺には方向音痴では無いはずなのだが、この先に進めば人里にいけるのだろうか？いや、聞いてた限りでは霧の出る所の事は出ていなかった。まず、此処から見える霧の奥で見える弾幕の光を見るのを止めよう。周りに季節違いの花が咲いているので話に聞いていた異変なのだろうか、軽く考えながら此処に居る原因となった事を思い返していた。

あの後、俺は永遠亭から人里までの方角を教えてもらい、能力で一気に行く必要が無いと思つて、歩いていこうと思ひ、歩いていった…これがまず間違えたと思う。

上や周りを見ていて、振り返ってみると何処が今まで歩いていたか分からなかった。まあ、似たような所ばかりだったから全く分からなかったけど…

適当に歩けばその内竹林から出られるだろうと思ひ歩いていった。結局、三、四十分歩いていてそれらしい所、つまり竹の見えないところが全く見つけれなかった。

永遠亭を出てからゆつくり歩いて大体一時間くらいで人里に着くらしいが、俺は永遠亭を出てから一時間半は経つていそうな気がするが全く着きそうにないし出れそうにも無い。

それから俺はなぜかあった小さな広場で休憩していた。

「どうしよう」そう呟いたのも仕方が無いような気がしたので言うてみたがやはり何も変わらない。

その事に溜息をついてから何かが近づいて来る音がしたので音のした前の方を見ると少し大きい妖怪が居た。大体三、四メートルくら

いの大きさだ。種類？そんな事分かるわけないだろう？それでも分かることはこいつは俺を食うつもりなのだろうと言う事だ。

俺はそのままその妖怪を見据えたまま俺の持つ霊力を放出してそいつに向かつて突っ込んだ。

が、俺は妖怪の隣をそのまま通り過ぎた。戦い？勝てるわけ無いだろうほぼ純粹な日本人をなめるなよ！スペルカードルールが通じない相手に対してどう戦えばいいのか誰か簡潔にまとめて教えてくれ。妖怪が俺の行動を少し時間をかけて理解したらしく十メートルくらい間がある状態で走っている。

やはり、人と妖怪では大きさや体力が違いすぎると思っていると急に後ろから追ってくる気配が無くなった。何故だろうと思つて立ち止まつて後ろを見てみると、息切れしていた。妖怪でも体力に限界があるのか。というよりも「諦めんなよ。諦めたらそこで終わりだぞー！」なんて言っていると復活したらしくまた即行で逃げた。

逃げていると、何時の間にか妖怪の数が増えていた。虫っぽいのか牛っぽいのかも増えて追ってくる。

つまり、見ていてなんとなく気持ち悪いのだ。客観的に見ていれば四、五体の妖怪と一人が同じ様な速度で一方に向かって走っている図なんて嫌だろう。十分近く走り続けて完全に振り切る為に俺は走るのを止めた。それにつられるように妖怪らも止まりだんだんと近寄ってきた所で能力で一氣に後ろに周つてから更に能力を使って直線で跳んで逃げた。これは戦略的撤退ではない逃亡だ！

そんな感じでここまで来たんだっけ。竹林から出てすぐ森で其処も越えてきたらここだったな。

そんな感じで回想を終わらせていたら

「あんた誰よ？」

脇の部分の無い巫女と会いました。それも、敵意を向けられながら

⋮

13話 脇巫k…最後だけだけど 結局、回想（後書き）

文才が欲しい。無いものはないので頑張っ て行きたいですね。

感想などがありましたらよろしくお願いします

14話 紅白と白黒と（前書き）

今までのあらすじ

道に迷いますた

14話 紅白と白黒と

「それであんたは何でこんな所に居るの？」

先ほど会った巫女から此処：霧の湖、何処なのかさつき聞いておいた：に異変が起きているのに普通の人はこんな所に普段から来ないし今は余計に来ないのに居るのか。

「いや、だから単純に道に迷っただけなんだよ俺は。だから、人里への行き方を教えてくれ」

「あんた、人里から来てるんだから大体の道筋くらい覚えてるんじゃないの？」

「いや、俺は此処で言う外来人であってこれから人里に行こうとしてた所なんだよ」

「えっ、そうなの？」

どうやら俺を人里から来て道に迷っていたと思っていたらしい。服装で分からなかったのだろうか。俺はため息をついていると

「ため息をついていると幸運が逃げるわよ」

別にいいさ。今更幸運が逃げても変わりはないだろうしな。

「結局のところ、人里にはどっちに行けばいいんだ？人里に向かっていたら厄介事に巻き込まれて此処に着たんだが…」

「そうねえ、あっち方向だったはずよ」

予想以上に適当な教え方なのだがそれで合っているのだろうか。

「大丈夫よ。博麗の感は結構当たるから」

「何故に感？どの位の割合で当たるんだよ」

「ほぼ100%くらいね」

それは感ではなくて、もはや予知とかの物ではないのだろうか。

どうでもいいがFATEの直感と予知とはどう違うのだろう、どうでもいい謎だ。

本人が感と言っているので感ということにしておいた方が楽であると言つか安全である。下手に地雷を踏まずに済ませたいが此処に来

た時点でもう駄目な気がするが。

「まあ、霧が晴れている内に行ったほうがいいわよ」

「嘘を言うな。霧が晴れているんじゃないって吹き飛ばしたの間違いだろって…あれ」

さっきまで霧がたち籠もっていて向い側だけではなく少し先もしつかり見えないくらいだった筈だったのに今じゃそれがなかった位よく見える。それから箒に跨ってこっちに向って来る黒い何かもよく見える。

「なあ、アンタ湖の方からこっちに向って来るの見えるか？」

「何言ってるのよ。そんなの居ないでしょ…いるわね」

その黒いのは普通にこっちまで一直線に來た途中で飛び出してきた水色の人(?)を撥ねていたけど気にしてはいけない。気にしたらここで生きて生けてけそうな気がしないからな。これは永遠亭に居たときの経験からだ。

「よう。霊夢こんな所で何してるんだ」

「魔理沙こそこんな所にいるのよ」

会話を聞いていると知り合いらしい。しかし、白黒と紅白だと白しか俺には共通点が見つけられないな。

話をしているが異変が起きているのでさっさと人里に行つた方が良さそうなのでさっき言われた方向に進もうとしてそんなに進んでいない所でさっき別れたはずの妖怪達と際会した。

俺は引き攣つた笑顔をしながら

「あはははは、こ、こんにちは」

言つた直後飛び掛つてきたので避けてさっき來た方向に逆走した。さっきの二人は異変の時普通に暴れていそう…白黒は普通に水色を撥ねていたことに気にしていなかったので後ろの奴らを瞬殺出来るのではないかと思う。

居た！というかまだ喋っていた。女性というのは長話が好きなのか？知っている奴がいたら出来れば教えてくれ。

「悪いけど、後ろにいる奴ら倒してくれー！」

叫びながら走るといふのは結構やり難い普段からやらないからなのだろう。

「だったら伏せろー」

そう言ってから白黒はこっちに向って手を突き出して

「マスタースパーク!!」

砲撃を撃ってきたが避けられそうなのは伏せるか上くらい横？範囲がでかいから無理、なので能力で上に逃げる。あんなのに当たったらくたばりそうだ。妖怪？普通に当たってたけど別に大丈夫だろう。座標を固定してないので重力に遵って落ちるが、弾幕ごっこではぼ落ちていたので着地はしっかり出来る様にしていたのだ。：誰に言ってるんだろう？

助けてもらったので一応礼を言う。が、伏せろ言ってから撃つまでに有余が無かったのはどう言う事だろう。

「えっと、ありがとう？」

「何で疑問系なんだ。そこはしっかり言うところだろう？」

「巻き込まれそうになっていたのにしっかり言えるか？」

「弾幕はパワーだぜ！」

「誰も聞いてねえよそんな事」

妖怪達とまた出会った事のほうを知りたいね。

「そつえば、あんたの名前を聞いてなかったけどなんて名前よ？」前にも似たような事があったのでさっさと答える事にした。

「月白光だ。あんた達は？」

「私は博麗霊夢でこっちは「霧雨魔理沙だぜ」まあ、そう言う事だから」

どういふことなのか分からなかったが気にしないでおう。

14話 紅白と白黒と（後書き）

ヒロインを全く決めてません。誰が良いか決めて貰いたいです。感想などありましたらよろしくお願いします。

15話 当方花映塚開始（前書き）

今までのあらすじ

巫女と魔法使いに会いました

15話 当方花塚開始

妖怪に今まで追いかけられていたが白黒つまり魔理沙の砲撃に助けられたのだが、もう少し安全な方法は無かったのか聞いてみたいが多分ないと返してきそうなので聞かない。

いま俺が考えないといけない事はどう安全に人里まで行くかだが、一つ目は、能力を使いながら行く。これはある程度安全ではあるがまた道に迷ったりするとかかなりの時間がかかるし、疲れる。二つ目は、この二人に付いて行き異変が解決した後で人里に行く。これは時間はある程度かかるがしつかり人里に行ける。そのうえ、幻想郷の事を知れる機会でもあると思う。二つ目の弱点は、この二人にそれを言つて、二人の内どちらかが許可しないといけなかったりするうえで、それに付いて行かないといけないので、移動が大変であるが、練習だと思っておけばいいと思う。そう考えると二つ目の方がいいと思う。

俺がこれからの事を考えが大体まとまったので目の前で話していた少女二人に話かけようとした時、「それじゃ、そろそろ行くか」俺の方を向いてそう言った。逆に俺は啞然とした。タイミングが良すぎないか読心術でも使えるんじゃないのかこの二人。

「行くつて、何処に？」

「それは、異変の起こっている最深部だぜ」

「謹んで、遠慮させてもらいます」

前言撤回、やっぱり無理だつてさ、弾幕がほぼ撃てない奴が行つても無駄だと思うし、今思うと弾幕ごっこが始まると動きが結構速くなったりする弾幕の濃さで変わるが…。その状態で俺がいれば邪魔になるだろう。なので俺は、歩いて人里に行こうと思います。…結局前者の方になったけど大丈夫だよな時間がかかる程度だろうし

「俺は時間がかかると思おうけど、歩いて人里行こうと思っている

ので、それじゃ」

まあ、これが上手くいかないだろうと思ってはいたので襟を引つ張られて動きを止められた。…扱けてない？そこは能力で使ってるからだそう言う事にしておけ。その状態から頭だけ動かして見ると霊夢が俺の服の襟を掴んでいた。

「何所に行くつもりかしら？」

「人里だとさっき言っただろう？」

霊夢は呆れた様にして

「残念だけどそっちは人里へ向かう道じゃないわよ」

「…お前、さっき俺の向かった方にあると言ってたなかったか」

霊夢は目を逸らした。嘘だったのか！

「嘘じゃなくて方角で見るとその方向にあるのよ。でも道は違うのよ」

あれ？そんな話初めて聞きましたよ。…いや、そんな事よりさっき読心術つかってなかったか？

「使ってないわよ。」

「いや、現に今読んでたし」

「感よ」

堂々と言い切った。何処から湧いて来るんだその自信は？

「霊夢の感はすごいぜ。幻想郷の異変の奥地まで一直線で行けるからな」

なにそれ怖い。それは感ではなく未来予知とかの領域ではないだろうか。

「それじゃあ、そろそろ行こうぜ」

「うん。行つてらっしゃい」

そう言つて俺は霊夢がさっき言っていた道の方へ歩き出した。ただ、後ろから「お前も行くんだぜ」と聞こえて頭に棒で突いたような衝撃が来て俺は地を離れた。

なんでこおーなるの？…思ってたよりうざいなこれ。

さっきの衝撃は魔理沙の箒で俺の頭に突撃して来たからだ。かなり痛かったな。俺は現在空の旅を恐怖を持ちながら続行中です。なんでかって、箒の持ち手？の先端部分にぶら下がるではなく箒の付け根？（掃く部分の金具で止めてある所）にぶら下がっているから最初は持ち手の方だったけど一回変にブレーキをかけたために落ちかけた。それで反射的に箒の付け根？の部分にぶら下がっている。で、そのまま魔理沙が速度を上げてそれに並ぶように霊夢が飛んでいる。「なあ、此処迷いの竹林だよな」

「そうだけどうかしたの？」

「…いや、なんでもないさ」

結局、戻ってきたな。永遠亭の奴らが聞いたらかなりの間それでいじりそうな気がする。

特にてゐと輝夜辺りが。

「この辺は何ともないのかしら」

「ない方が良くないじゃないのか？」

俺は霊夢の呟きに俺は答えた。だが、霊夢は何か不満なのか「あんなは分かってないわね」みたいな顔をしている。

「異変が起きないと私の生活が大変なのよ！」

それを俺に言っでどうしたいのだろうそれ以前に俺は金ですら持っていないのだが…それこそどうしようと思んでいると

「あなた達何をしているのかしら」

今まで聞いたことのない声が聞こえて声のした方向を向くとメイドがいた。

「何って異変の解決よ」

「霊夢、此処は私が行くぜ」

とんとん拍子で弾幕ごっこ開始

俺？急いで箒から手を放して着地しました。

他人の弾幕ごっこはあまり見たことがないのでしつかりと見させてもらおう。

15話 当方花塚開始（後書き）

感想などがありましたらよろしく願います。

教訓パソコンが重いからと言って無暗に弄らない。

16話 季節ネタ？ 七夕（前書き）

思いつきで行った反省はしているけど後悔は…少ししています。

16話 季節ネタ？ 七夕

幻想郷に来てからそれなりに日が経ち俺は人里で住んでいる。と言つても、大通りではなくそこから少し狭い道を通った所にあるのだが。俺はそこで店を開いているといつても来るのはほとんど暇人の冷かしなのだが…まあ、俺はそこで万事屋をやっている。先に言つたように入り具合はほとんどないので某万事屋トリオと同じようなのだが。

これはとある日にあつた話である。

「七夕しない？」

霊夢は昼過ぎに店もとい家に来てそう言った。

なぜに七夕？宴会ではないのかと聞くと、

「宴会もあるけど、今日は七夕でしょう？」

どうやら宴会と七夕を同時進行でやるらしい、七夕といえば天の川で織姫と彦星が思いつくのだが、なんというか、こうその二人が幻想入りしていそうな気もしない訳なのだがどう言う事だろう。

「それで？宴会または七夕はいつも道理神社でやるのか？」

「そうなるわね。里に居るんだし何かと買つて行こうかしら？」

現在、霊夢は俺が受けた依頼で手伝ってもらつた時に一年くらいの余裕ができてちよくちよく買い物しに来る事があるのだが、

「買すぎるなよ」

一度、食料を一気に買つて処理し切れなくなりそうな時があつた。

まあ、俺が能力を使って腐るのを遅くしたのだけど…

「分かつてるわよ。あの時は大変だったもの」

どうやらあの時の事に懲りているようだ。

霊夢はそう言いつつ玄關の方へ歩いて行き、とを開け閉めする音がした後何も聞こえなくなつた。

俺は息を深く吸つてため息をついた。

霊夢からの宴会もとい七夕の連絡は既にあつたからだ。あいつらそんなに俺に知り合い少ないと思っているのかと聞きたい。友達とはかく知り合いはこの仕事をしているのでそれなりに居る。最初に聞いたのは魔理沙からだった。

朝起きてから、朝は冷えるなと思いつつ朝食の用意をしようと台所に行こうとした時に来てそれだけ言つて台所にある冷蔵庫もどきから飲み物を持つて貰つていくぜと言つて飛んでつた。…何しに来たのあいつ？

霊夢からの開始予告を聞いてから三時間くらい経つた頃に何か持つてたうえで用意の手伝いでもに行くかなと思ひ家を出た。その間は家計簿とかつけて時間をつぶしていた。

人里は平日でもにぎやかである。理由は此処と再起の道にしか店は殆どないからだ。妖怪の出るような所で店なんて殆ど出すような奴も居ないだろうから、此処は異変の時以外はにぎやかである。此処で住んでるうえで一応店もやってるのでそれなりに顔は知られているし飲食店の方々とは結構な付き合ひをしている。なぜかと言えば料理のレパトリーが少なかつたので教わりに行つたりしたからである。兎に角も、持ち込みやすいお握り等は殆ど俺が持つて行く事が多くなつた。あと、酒も持ち込んでいる。

ある程度買ったのでさつさと神社に行こうと思ひ荷物もとい持ち込み物に名前を書いた紙を貼つて神社に送りつけた。送つた後俺は結局慣れてないがそれなりに速くなつた移動で移動した。

俺が来た時にはもう夕方方で既に宴会の用意と七夕に使うとされる笹が用意されていたうえでもう宴会は始まつていた。見渡すだけで紅魔館、白玉楼、永遠亭の他にも結構な人数がいた。

俺も宴会に混ざり夜が明けるまで宴会と七夕で短冊を書いたりして楽しんだ。

16話 季節ネタ？ 七夕（後書き）

前書きでも書きましたが反省はしているうえで後悔もしています。元々この小説はノリで出来ているのでどうしようもないと思います。もっと伸ばせたのではないかと考えますがこれが、これが作者の実力です。できれば後々書き直したりしたいです。

17話 東方花映塚続き（前書き）

いままでのあらすじ

前回、季節ネタを行った。

前々回、箒に引っ掛かって異変解決の巻き込まれた。

グダグダであるので、読み難いと思いますが、どうぞ

17話 東方花映塚続き

俺が着地して上空に目を向けた時にはもう弾幕ごっこは始まっていた。

魔理沙はレーザー？的なものを撃っていたが、撃っている相手はメイドではなく妖精である。弾幕ごっこだよなあ。なんで撃ち合っていないんだ？あんまり知らないけどさ。メイドの方はナイフを投げている。よく真っ直ぐ投げられるなそれ以前にナイフは無くならないのか？その辺の不思議は多分幻想郷だからで結構済みそうだよな、転送系の能力とかありそうだし。

しかし、対人の弾幕ごっこじゃなくて何かを挟んで撃ち合っているような気がする。

いや、それ以前に俺から見ると

「あのメイド誰だよ？」

まったくもってメイドの知り合いなんていないし、いやもしかすると実際のメイドとして仕事をする人が居なくなつて幻想入りしたのかもしれない多分そうなんだろう。結局、メイド服着てるからメイドとして働いてるのか？さすがに興味で着ている人はいないよな。

「何ブツブツ呟いてるのよ」

いつの間にか後ろに霊夢が居た。こいつが飛んでる時から弾幕ごっこをしてなかったか？ただ忘れられていただけなのか、巻き込まれても大丈夫という認識だったのか。多分後者の方だろう、異変解決をしているという事はそれだけの實力持っているという事になると思う。巫女と異変の関係って何？

「今度は何を唸り始めてるのよ」

「いや、異変と巫女の関係性について。だから、当事者として何か知らない？」

霊夢は思い出すことがあるのか、何か呟きながらいて

「知らない」

「何だったださっきの眩きは」

「昔教えてもらったように気がしてただけだから」

それは教えたのだろうか、それとも忘れられたのだろうか、どっちなんだ先代巫女？

などと考えていると咲夜（さつき霊夢に教えてもらった）の方に魔理沙が現れた…え？なにそれ、どんな原理でやれるのそれとは聞きたくなることをしていたが咲y：メイドでいいや。メイドはそれに対して驚かずに弾幕をかわし弾幕もといナイフを刺していた。えぐいね、それでも魔理沙（偽）ナイフが刺されていても弾幕を撃ち続けている。なんらかのプロ魂でもあるのだろうか魔理沙（偽）にはそれとも魔理沙自身があんな感じなのだろうか。どちらにしても見た目が怖い白と黒のエプロンドレス？にナイフが何本も刺さっていてそこを中心に血が滲んでいるのに疲労や痛みを感じないように見えるのだから怖い。R15がタグについていないけど此処までならOKなのか？それでも、魔理沙（偽）の弾幕がメイドの体力を奪い切った！…体力って今まで出てきてたっけ？結局見ていないな俺魔理沙がメイドに何か言っているがここでは聞き取れなかったが

「この……。こ…お茶に…お嬢さん……。どうだ？」

よく分からないが何を進めているのだろうか。服のポケットから取り出さなかったかその草？異変中に取ってきたのか？それとも元々入っていたのだろうか。

「それじゃあ、次行くか」

そう、魔理沙は宣言し霊夢も頷いたので魔理沙は箒の先端を俺の方に向けて突っ込んで来た。

「待…て、自分で自分で飛ぶうううおおお！」

走りながらそう言ったが結局のところ湖と同じ展開になった。…2
面クリア？

「痛たたた、＼（。ロ＼）ココハドコ？（ノロ。）ノワタシハダアレ？」

最後だけネタをやってみた。テンプレの転生でよく有りそうなのを。「まだ、竹林よ。なんで抜けられないのかしら？」

「ついに霊夢の感でも抜けられなくなっただか」

「そんな事ないはずよ」

何分気絶していたがわからないがまだ竹林の中らしい…知り合いにこんなこと出来るのがいるから余計にたちが悪い。どうせその内こつちに来ると思うから攻撃用意をしておく。

「ついに来たわね。」

そちらから来たのですがあえて言うのか。

「そこに引つ掛かっているのh「先手必勝！」…え？」

鈴仙とてゐの二人だったか弾幕ごつこの宣言をしてないが関係なくとも弾幕を撃ち込む能力で速さ、数、威力をかなり上げて撃った。あえて言うなら無理ゲーみたいなものである、進行方向に向かつて避ける所を二人から最も遠い所において、一人しか避けられないタイミングにしたから。…弾幕ごつこは苦手なくせになぜそんなことが出来るかといえば能力の恩恵にしておけば大体大丈夫だろう。結果は二人とも避けきれずに墜落。しかし、何を言おうとしたのだらう？

「ねえ、さっきのは反則じゃないの？」

「今のは、さっきいた妖精とかがまた出てくると思うと邪魔になるから一掃しておこうと思ったから撃ったのであつてさっき出てきた二人が何か言おうとしていたのを邪魔…じゃなくて偶然タイミングがあつたからあなつたと思うけど」

一気に行つてみると結構疲れた。大変だね、一気読みをしている人は俺は三行読んだだけで疲れているから。

「いや、先手必勝って言つてたよな」

「いやいや、あれはあれだよ…えつと、ああ、あれだあれ。気合を入れるためのセリフみたいなものだ。スペル宣言をするのと同じだ

…多分」

「多分じゃ、駄目だろう」

その後、俺が言い訳をしているうちに竹林を抜けていたのでそれいじゅの追及はなかった。ありがたくそのまま3、4面クリア?したのかなあんな方法だったけど。まあ、良いか。

18話 道に迷ったり、異変解決しに行ったり（前書き）

今までのあらすじ

メイドと闘ったり（魔理沙が）兎を倒したり（不意打ち）した。

18話 道に迷ったり、異変解決しに行ったり

前回、成り行きで倒した鬼二羽：二人？二匹？を先手必勝つまり行動的には不意打ちに近いが落としたからいいだろう。

今現在俺達三人ではなく少女二人が向かっている方向に強制的に連れて行かされている俺なのだが下を見ると木しかなかった。

つまり、森であるが、やはり幻想郷普通である所の方が少ないらしい。

俺にはよく分からないがこの森には瘴気：つまり毒に近いものが立ち込めているうえで光が入らない位枝が茂っている。

だから、普通此処には人は来ない。何が言いたいかというと道に迷うと大変だよ。と、言いたい訳なのだがなんでこんなことを言うかという、また道に迷いました。

正確には森の方から飛んできた弾幕を二人（俺は箒に引っ掛かっていた）避けた拍子に落ちた。

：能力で止まればいいのだが弾幕が撃たれているので止まると余計に当たるので、あえて一言言ってから自由落下してきました。

怖いね、自由落下。速度がどんどん上がって行くから速度を緩めようとしても現状維持で精一杯になった。

枝がクツションになったうえで俺が半人半魔――だったような気がするが――じゃなかったら速度を落としても打撲じゃすまない気がする。

それでも、幻想郷に居るのは大丈夫な奴らばかりだろう。

俺の今の目標は『森から出て、安全な道を通り人里まで行く』なのだが森が広すぎるうえに竹林ほどではないが道が：道が分かりにくいです。

どれもこれもとはいかないが大木が多いので目印にならないうえで木に擬態した妖怪もいるので余計に性質が悪い。

あと、擬態が見破れるのかといえばてゐの仕掛けた罠を見破れる

様にしたらそこだけ周りと違うという事がなんとなく分かる様になったのだが普段から使えない能力である。

兎も角、さっさと出たい事この上ないのだが、さっきから妖怪に追われているので面倒になっていた。

過去形なのは逃げ切ったからだ。単純に霊弾の数を増やせたので、いろいろな物の数を増やせると思い、自分の数を増やして逃げ切った。これは、身代わりになるのだがフィードバックが来るので特訓には丁度いいがしんどい事が分かり、逃げている途中で光が入ってきている場所を見つけたのでそこから上に登った。…物語進んでねえ。

兎も角、そこからなんやかんだで霊夢達と合流して自分で移動することになったので、正直ありがたい。

「ところで、今何処に向かっているんだ？」

ようやく台詞が出るが気にしてはいけない。

「知らないわ」

「知らないぜ」

両者共に無計画で異変解決して来たのか？

さっきから幻想郷のあちこち探索してきたような気がするのだが解決まで行っていないのはなぜだろう？

気にしたら負けな気がするので聞かないが。

俺達の目の前にはこれでもかと言うくらいに鈴蘭が咲き誇っている場所だ。

鈴蘭は強心配糖体のコンバトキシン、コンバラマリン、コンバロシドなどを含む有毒植（Wikipediaから引用）なので正直に言えば危険である。能力で毒に耐性あげられるから楽である。鈴蘭の毒は摂取しなければいいのだからそこまで危険視しなくてもいいのだ。…一応、知識として覚えておいて損はないだろう。

その鈴蘭畑から少女が出て来た所から現実逃避という解説をしていた。

だって、話聞かないし会話内容なんて、

「なんで鈴蘭畑k「あなた達スーさんを奪いに来たのね!!」…いたのかなあ」

「あなた達此処に何しに来たの」

「異変解けt「すーさんをうばいにきたのね!」すいませーん、人の話聞いてる!？」

まったく話を聞かない。どうしたものかと思っていると霊夢が、

「此処の住人はほとんど話を聞かないからね」

「それ、お前らも入っているよなあ!」

「いや、お前も入っていると私は思うぜ」

もう既に俺は後戻りできなくなっていたらしい。異変解決に巻き込まれたもんなあ。

遠い目をしながら空を眺めていると、どうやら霊夢と鈴蘭好き（仮）とが弹幕ごっこを開始していた。

霊夢はお札を撃つて…投げて?妖精を蹴散らしている。消費量がかなり多いんだろな。対する、鈴蘭好き（仮）は基本的によくある霊弾を撃っている。

たまに霊夢の方に紫の霧がメデイスン（今度は魔理沙から聞いた）の方に座布団?と例えるのが良い物や陽陽を表す丸いのが飛んでたりする。どっちにも沢山飛んでいるのだが両者共にそれらを避けて反撃している。どちらも多くの弾幕を放っていて避け切れずに当たる事もあるが霊夢のほう当たっていないが、霧はそのまま後方に来るのでスペルで応戦してその副作用のようなものでメデイスンの方に向かっていき、白い妖精（リリ・ホワイト）が大量の弾幕を放ちどちらも完全に避け切れずに当たったが霊夢の方がそれまでに当たった数が少なかったたのでそのまま勝った。

「毒も程々にしないと、身に毒よ。」

ああ、あの霧は毒の霧だったのか。しかし、中毒者に言ってもあまり意味はないと思うぞ。

そのまま俺達はそこを離れて別の場所へ向かった。向かった場所には一面向日葵が咲いていた。まだ、咲く時期ではないのでやはり

異変の影響を受けているだろうかと思いつながら進んで行くと向日葵の中に傘を差して歩いている人が居てこちらに気付いたのかこちらを向いて一言言った。

「こんにちは。不法侵入者さんたち」

18話 道に迷ったり、異変解決しに行ったり（後書き）

次回、ラジオをしたいと思います。

感想、ネタなどがありましたらよろしくお願いします。

19話 ラジオと冥界訪問と虚刀流（前書き）

今までのあらすじ

ゆうかりんランドに行きました

19話 ラジオと冥界訪問と虚刀流

幽香「はい、こんにちは。本日は風見幽香で幻想郷オールナイト全時空in太陽畑でお送りします」

光「展開が急すぎるううううー!!」

（OPBGM）（ご自由にお聞きください）

幽香「始まりました。第二回ラジオですけど連続出演の光さんはどう思いますか？」

光「まず、前回の不審者発言からは思えないような切り替えっぷりだなと、思います。あと、此処何処ですか？」

幽香「私の家よ。ちよつとセッティングしたくらいだけどね」

霊夢「まあ、前回後書きで書いたとは言え急な展開よね」

魔理沙「それもそうだよなあ」

光「だからと言って急にラジオをさせられる俺の身にもなってほしいな。面倒だし。あと、二人して他人の家で普通にお茶を飲んでいられるの？みんなして馬鹿なの？」

幽香「それは誰に言ってるのかしら？」

光「特に意味はないんですけど…すいません謝りますから起こった状態な上でにこやかな顔をして殴ろうとしないで下さい」

幽香「嫌よ」

霊夢「殴られている音バックにして会話を進めましょうか」

魔理沙「間違えたら死ぬけどな。とはいえどう進めるんだ？」

霊夢「外（感想など）からは何も来てないからこっちであつたので進めるつもりよ」

幽香「なら、初めはお便りのコーナーかしら？」

魔理沙「此処にいるという事は…あいつは見るからにR指定がかかりそうな状況だな。殴ったというよりも何か固いものを叩き付けた

ような状況だな」

幽香「殴ってない所の方が少ないうえになんというか…こう？肉に挟り込む様な感じで殴ったというのがあるうえに、なかなか死ななかつたし」

魔理沙「もはや殺すことを決定したうえでの暴力だぜ」

幽香「それは気にせずにコーナーへ」

霊夢「『お便りのコーナー』と言ってもお便りがないんだけどね」

魔理沙「お便りだったらスキマから届くらしいぜ。…ほら、来た」

幽香「一枚目：『匿名希望者』から『今起きている異変はいつ解決されるのですか？』との事ね」

霊夢「博麗の巫女が解決します」

魔理沙「そこは即答するのかよ」

霊夢「そうでもないかと忘れられそうになるのよね…うちの神社」

魔理沙「えっと…悪かった？」

霊夢「なんで疑問形になるのよ」

魔理沙「そこまで気にしてないのかと思ってたからだな」

霊夢「威張って言う事かしら」

幽香「まあ、二枚目行くわよ。これも匿名だけど送ってきた場所が紅魔館からね。内容は『泥棒対策はどうすれば良いですか』簡潔にまとめるとそう書いてあるわ」

霊夢「畏でもはったかどうかしら？」

魔理沙「諦めて欲しい所だな」

霊夢「それ犯行をしている人のセリフよね」

魔理沙「褒めるなよ」

霊夢「褒めてないけどね」

幽香「それはいいけど、あそこにあるのどうしましょうか」

魔理沙「自分で殺っておいて言うのか」

幽香「まだ殺してないけど。向日葵の肥料にしようかしら」

光「人のいない所で恐ろしい事考えないでくれる」

幽香「ツチ…生きていたのね」

光「舌打ちを聞こえるようにやっているのか。嫌がらせだろう、もう」

幽香「そんな事ないわよ…一応」

霊夢「お便りもないしこの辺で終わりかしら」

光「どんな終わり方だよ」

魔理沙「以上！終わり」

霊夢「お疲れ様でした」

幽香「お疲れ」

光「これで良いのかよ」

えっと…月白光です

とりあえず、殴り殺された辺りから話を進めさせてもらおう。

殴られている時から能力で少し自然回復力を上げていたからその内復活するだろうと思っていたが、殴るというよりも鈍器で殴られているような感じな上で内臓に骨が刺さりかけたような気がした。この時に気付いたが俺の能力の根本は数値の変化なのだろう。

そのまま痛みで気絶して、知らない所に居ました。周りを見渡すとどこかの庭のように見えるが永遠亭では無いことだけは分かった。そしてかなりでかい庭である。それなのに誰一人として庭に居ない異変中とは言え昼間なのに誰もいないのはおかしいだろう。その上見渡す限りで壁がないという事は、永遠亭よりも広い屋敷なのではないのかと思いつながら何時まで此処にいますと不法侵入者…否、侵入霊になるのだろうかこの場合だと。

そのまま適当に霊夢のように感ではないが、なんとなく人の居なさそうな方へ歩いていくと、よく幽霊は白い肌みたいなことが考えられたりしそうな気がするがそのくらい白かった。そして、その人…否、幽霊（？）を俺は見たことがあった。鑢家家長『鑢七実』日本最強にして最弱と言えるような人だ。弱くあるために長生きするた

めに他人の技術を見取っていた。そして、最愛の弟に殺してもらった人物。

「あら？あなたはどこから来たのかしら」

「何処つて…それは……」

言えない。気が付いたら此処の近くに居ましたなんて。嘘でもいいから入口から入りましたとも言っておこう。

「…入口から入りましたが問題がありましたか？」

「嘘ですね」

瞬殺された。そんなに分かり易かったのだろうか。さっき言葉に詰まったのが原因だろうか。

「あなたが来た方向は門とは逆方向ですよ」

まさかの回答だった。だが、言い逃れる方法はあるはずだ。…なんで、言い逃れようとしてたっけ？多分…否、本人だろうから何らかの武術でできれば虚刀流を教えてもらいたい。

「そういえば、お名前聞いてませんでしたね。私は、鑢七実です。」

「月白光です。七実さんで良いですか」

「良いですよ。どうかしましたか」

どうせ嘘を言ってもばれるのならば誤魔化すよりさっさと言った方がいい。

「虚刀流を教えて下さい」

そう言いながら頭を下げた。頼むときは、礼儀をしっかりとしないといけない。

「虚刀流をですか？」

俺はその質問に肯定の答えを返した。そのあと少しばかり無言の時間が続き、

「まあ、良いでしょう。ただし、しっかりと学びなさい」

それで俺は、虚刀流を教えてもらった。時間的に足りないだろうか。能力で体感時間を延ばした。感覚的には、うえきの『一秒を十秒に変える力』に近い。これを使い虚刀流の一通りの技を完了はいかず完成に近い形になった。

七実さんの見稽古を東方風にすると『見た技術を自分の技術にする程度の能力』となるんだろうな。

稽古をやっていると俺がさっき来た方向から白い饅頭と少女がやってきた。

「七実さん幽々子様が呼んでますよ。それとそこの方は？」

「一応、私の弟子？になるのかしら」

七実さんはそのまま俺に話を振ってきた。俺は、分かる範囲の上で答えた。

「弟子かどうかと言われれば教わっているから弟子なんだろうなあ。それとあんた誰だ？」

此处で一回やって来た少女に話を返す

「わたしは白玉楼^{うしろ}で庭師をやっている魂魄妖夢ですが、あなたも名乗ってないですね」

撃ち返された。それは、例えるなら野球のピッチャー返しのようにテニスのスマッシュのようにボクシングのカウンターを食らったがごとく。このまま例えているときりが無いので終えるとして、一応自己紹介をした。

「俺は月白光、一応虚刀流を使える」

妖夢は虚刀流の部分に驚いていた。そんなに七実さんが虚刀流を教えたことに驚いているのだろうか？

七実さんと妖夢は白玉楼に行くらしいが、そろそろ戻らないと冥界で生活しないとダメになりそうだから戻ろうとするがどうすれば良いかかわからずにいて体感時間を延ばして考えた結果肉体と魂の距離をゼロにすればいいことに気づき戻った。肉体と魂が同化しないとダメな為少しの間動けずにいた。

それでも五感はあるので話を聞いていると本当に殺されそうになったので無理やり起き上って話に介入した。

「人の居ない所で恐ろしい事考えないでくれる」

俺が復活して残念がつて舌打ちをして

「ツチ…生きていたのね」

露骨に此処まで隠さないのは確実に勝てるからだろう。霊夢や魔理沙は置いて

「舌打ちを聞こえるようにやっているのか。嫌がらせだろう、もう」
俺は思ったことをいうと

「そんな事ないわよ…一応」

なんともまあ、残念がつて言うドSだろこの人。

「お便りもないしこの辺で終わりかしら」

霊夢がそう言つて此処で俺はラジオをやつてたんだっとなと思ひ返しながら、そして少しあきれながら言葉をこぼした

「どんな終わり方だよ」

俺とは対照的に元気な魔理沙たちは元気に各自で締めの一言を言つて

「以上！終わり」「お疲れ様でした」「お疲れ」

それを眺めていた俺の一言で終えた

「これで良いのかよ」

これで良いんです。一応

19話 ラジオと冥界訪問と虚刀流（後書き）

口調あってるんでしょうか？

感想などありましたらよろしく願います

20話 花映塚終了（前書き）

いままでのあらすじ

ラジオ放送をして、冥界に行き七実さんと会って虚刀流を体で覚え
ました

20話 花映塚終了

前回、半分くらい死んで冥界に行き七実さんから虚刀流を教えてもらってある程度接近戦ならそれなりに戦えるようになった。……

本当に少しだけで例えるなら二面の中ボスより少し弱い位だと思う。最低でも三面ボス位にはなりたいなあ〜と思いつつ移動中。

行き先？霊夢の感で移動してるけどさっきから西から東へ何回も移動している。

「何処に向かっているんだ？」

俺は先頭で飛んでいる霊夢に聞くと

「霊の集まってる場所」

「冥界だな」

「さっき行つたけどそんなに居なかったぞ」

霊夢があつさり言うのにつられて魔理沙も言うがそんなに例が居なかった事を俺は知っていたので否定しておいた。

そもそも、冥界はこっちの方向であっているのだろうか……普通に冥界まで行けるんだろうなあ。

山の隣を通り越して彼岸花が大量に咲いている道をも通り越して彼岸花と不気味な位狂い咲きしている桜の近くで一人……こんなところにいるが人なのだろうか分からないが誰かいた。

ゲームなんかで出てきそうな大きな鎌を持っている和服かどうかはよく分からないが赤毛で長身の女性で、その人物はこちらに気付いたようで振り返り話しかけてきた。

「あれ？こんなところで何してんだい？」

「その台詞そのまま返しますよ」

「仕事してんのさ」

胡散臭いがこんなところに居るのだから一応仕事しているのだろう。

「そう言うあんた達は何しに来たんだい？」

「異変解決に決まってるじゃない」

決まっていたのか。何処であろうとそれなのか。

この人の名前が分らないな。赤毛で良いか。

「赤毛さん。あんた仕事してると言っただがどんな仕事だ？」

「赤毛って…あたしには小野塚小町と言う名前があるんだが」

名前を知らなかったのだから特徴で呼ぶしかないのだ。

「それで、小野塚さんは此処で何をしてるんだ」

「何って…仕事だって言ってるじゃないか」

まさかのループなのか、いやこの場合は説明が足らなかったのか？
どうでもいいが

閑話休題

「それで、小町は三途の水先案内人をしているという事で良いんだな」

「まあ、そうだね」

数分かけて小町からしつかり職業を聞きつめると、種族 死神：それこそ職業じゃないのか？えっ…職業と種族が一体化しているのか…それは違っていて職業はさっき言ってた三途の水先案内人？死神も三途の案内人もあんまり変わらないと思うのだけど

「……ここでずっと話しているけど仕事はしなくていいのだろうか」

「それなら休憩中だからいいんだよ」

「いやいや、実際そう言いながら仕事をさぼってる奴なんて結構いるんだから仕事したら」

俺は、少しばかり呆れた目をしながら言った。

「そんな真面目さんは世界中探しても務め始めてから一、二年でいなくなるだよ。最低限の仕事さえすれば一応給料は貰えるだろうし」

そんなことを言っている死神……この場合は水先案内人の仕事時間ってどの位なんだろう。それとサボると余計に仕事時間増えるんじゃないのか。魂がどうのこうのとかで仕事の時間を増やされ

そうである……多分。

霊夢と魔理沙は閑話休題したあたりで自由に何かしている。霊夢はこの近くにいる幽霊を勝手に除霊している……そう言えば除霊した後、霊は何処に行くのだろうか？魔理沙は自分の道具を確認していた。何処にそれだけ仕込んでいたんだ。戦場ヶ原さんの文房具みたい持ち運んでいるのか？半袖だけどうも場所少ないな。

「ずっと話し続けるのも何だから、動くか？」

俺は、小町にそう問いかけて向こうがそれに肯定したので立ち上がった。動くと言っても運動ではあるがやはり弾幕ごっこだが、接近戦込でやることにした。そうでないと俺が不利過ぎるから。

俺達はそれなりの距離大体一〇メートルを開けて立っている

小町はさつきと変わらず普通に立っている。鎌は両手で持っていて握って肩にかけている。

俺は、虚刀流七の構え『杜若』でいつでも動けるようにしている。ちなみに、審判役に霊夢が居る。

俺達は、否、俺は合図があつてから即座に小町の鎌の目測での射程範囲に入り込み逆に鎌が振れない距離を保ちながら攻撃するために『蒲公英』を打ち込んだが、ついさつきまでそこに居たはずの小町は急にさつきいた場所から少し下がっていて、鎌を振り下ろした。俺は技を撃ち終わった状況から体重を前方にかけてから『薔薇』に繋げて攻撃したが、また後ろの方へ移動していた。

瞬間移動と言うよりも地面を滑るように移動していた。

死神の鎌にしる能力にしる俺の現状からだとか厄介だという事には変わりはなく、相手を探るために一の構え『鈴蘭』で攻撃を待っているが一気に距離を縮めて来たので攻撃を受け流して反撃しようとする瞬間、小町の姿が消えて俺は反射的にしゃがんだ。

「へえ、今の避けられたんだ」

「そいつはどうも！」

しゃがんだ状態から『牡丹』を繰り出しながら立ったが、これは

後ろに跳ばれて避けつつ、弾幕を撃って来た。弾幕込の接近戦じゃなくて接近戦込の弾幕ごっこだったな。

それを認識し直した後、密度も威力も少ない弾幕を小町の居る方向の空いている隙間に打ち込みながら弾幕の中に自分も突っ込んだ。小町は俺の撃った弾幕を弾きつつたまに避けながら弾幕を撃って来た方向に多く撃っていた。

俺は、弾幕を避けながら当たりそうなのは霊力を纏った腕で逸らしながら近づきながら弾幕をさつきよりも多く撃ち込んで地面に当たった弾幕で砂煙が満ちるのを待ちつつ接近していた。撃って来た方向に弾幕が集中するので撃たれる方向、つまり小町の後ろの方から弾幕が来るように能力を使用しながら調整して、そちらの方に弾幕が集中したのを認識すると能力で小町の上に移動して攻撃に移った。

「虚刀流七の奥義『落花狼藉』！」

俺は、自らの足を斧と見立てた踵落としを行ったが、直撃する一歩手前で小町が前方に移動していた。

落花狼藉は不発と終わり地面に当たった。

「今のは危なかったね。それにしてもどうやって移動してきたのさ」
「それを教えたら負けるだろうが。それを言うならお前に攻撃が当たる直前に何回も前後に移動してるだろうが。解けその能力」

「嫌だよ。解いたら攻撃が当たるだろうし」

それもそうだが、当たらないと終わらない。それにしても、落花狼藉は避け切れなさそうな距離で言ったがどうやって移動したんだ？当たると確定していた距離で避け切られていたから移動系の能力なのだろうか。弾幕は弾いていたからよく分からないな。

「考え事をしている暇はあるのかい！」

そう言われた瞬間目の前に鎌が通り、薙ぎ払いから切り上げ振り下ろしそこから回転を加えて薙ぎ払い振り下ろし振り上げると言った感じの連続攻撃が行われて俺は薙ぎ払いは確実に避けて切り上げと振り下ろしは出来るだけ避けつつ弾いていた。

このままでは本当に終わりそうにないので反撃に出た。

切り上げを行った時に虚刀流三の奥義『百花繚乱』で鎌を次の攻撃に繋げ難くして能力で距離を縮めて固定し最終奥義を撃ち込んだ。
「七花八裂！」

相手に虚刀流にある七つの奥義をほぼ同時に叩き込む奥義を、小町に打ち込んだ。

「やつといて何だが、大丈夫か？」

俺は、さっきと言っても十数分前まで戦っていた小町に安否を確認した。

「その大丈夫の定理が生死だったら大丈夫だね」

七花八裂は受けて十数分で回復が出来るものだろうか。

そう言えば霊夢と魔理沙はどうしたのであるう。戦っていた時は弾幕ごっこをしていたと思うが。

「あれ？終わったの？」

「何だその言い方は「まるで終わりそうに無かったの」にみたいに聞こえるぞ」

「そうだと思ってたけどな」

霊夢と魔理沙が戻ってきた。それと、後ろに居る帽子をかぶった緑髪は誰だ？

「あなたですか。小町と戦っていたと言うのは」

「？…ああ、俺か。まあ、そうだな」

隣で休んでいた小町と霊夢、魔理沙は耳を押さえていた。

「そう、あなたは此処にいるべきものではない。自分の居場所に帰れないでただ流されているだけ。それも、ただ流されているだけじやなく周りも巻き込む大木のような存在。あなたの罪は自分で決定しきらないこと。あなたは今すぐ私に裁かれなさい…って逃げないでください！！」

逃げた。ただ逃げた。罪のあたりで逃げた。説教を受けるのはいが裁かれるのは断らせて貰おう。説教と裁きから導かれる職業 + 死神の上司？ 閻魔？

まあ、良いや。今は逃げるのみ。

十分後、捕まって裁かれて（弾幕を食らう）冥界に半霊状態でま
た行きました。

20話 花映塚終了（後書き）

感想などありましたらよろしく願います

21話 裁判の後にまた冥界（前書き）

いままでのあらすじ

小町と戦って勝った後に閻魔様
なく裁判と言う弾幕を食らう

映姫様に弾幕という裁判では

21話 裁判の後にまた冥界

まあ、死にかけてまた冥界に行った。

前回ついた場所とは違う所に立っていた。見渡せば、前に階段、後ろに階段、左右に桜。

冥界だと思うけど何処なんだろうね。まあ、また歩いていくんだけど。

そう思いながら、階段を上って行った。

……長くないかこの階段。十分以上歩いているのに頂上が見えないんだ。最初に居たところでは、地面が見えたのに……降りればよかったのかあの場合。

今更そう考えても無駄なので上ることにしているのだが、結構面倒になってきた。異変は解決されたいが、此処にいる妖精達は俺を見つめるなり、向かって来るのを撃退しなければならぬし、遠くにいるのは弱くても弾幕で一応倒せるけど、特攻を仕掛けてくるのを撃退するのが本当に面倒なのだ。

普通に殴り蹴ると言ったことをしても威力が弱いから後ろに飛んでいくだけなので殺傷性を持つ虚刀流の技を使った方が良いのだが数は多いし、幽霊もたまに居たりするので弾幕と接近戦をうまく分けないと戦いにくいというえに幽霊に接近戦は無理だろうから弾幕で落とすしかない。

足場も不安定という事もあり立ち止まりながらじゃないと撃退は出来ないという事もあるので進んで戦ってを繰り返している。

経験値はいらない。なぜならレベルを上げると、怠慢になるから……それでも、経験値は手に入るが、レベルは上がらない。

と言うか、レベルが上がっても呪文も特技も手に入らないんだろ。うな。それでも技の熟練度は上がるから例えると何だろう？

そう考えをまとめてまだ見ぬ頂上を見ながら　まだ見えないが階段を上って行くと上の方から三人飛んできた。

誰だろうか分からないが戦闘にならないだろうと思いそのまま進もうかと思いい進んでいると、さっきの三人のうちの一人が急に降りてきて腰に差していた刀を振り下ろした。

俺は、何とか頭を　一刀両断とも言う　切られずに後ろに跳び、足場を製作しそこに一度降りてから、階段に降りた。

「貴様、何者だ！」

「その台詞、そのままバットで打ち返してやるよ」

そう言いつつ、襲ってきたやつの特徴を確認すると白髪、二本の刀、少女、半霊。つまり、魂魄妖夢であった。

「ってなんだ、妖夢か」

襲ってきたのが一応、さっき知り合った奴だと分かると俺は呆れた。

「なぜ私の名前を知ってるのですか。答えなさい！」

「答えを聞くなら切りかかろうとするか？」

そう言いつつ、俺は向かって来る刀を何回も逸らしながら階段を上り下りをしていた。しかし、刀を振りながらここまで階段で動き回れるのだろうか。コツがあるなら後で聞こう。

技を仕掛けるとしても足場が悪いため仕掛けにくい。ならば、さつさと名乗って終わらせる。

「俺だ。月白光だ。分かったからもう振るな」

そう言いながら俺は、白刃取りをしていた。妖夢の方が上に居たので簡単にできた。

「そんな訳ないでしょう。彼は男です」

「お前は、俺が女に見えるのか」

地味に傷ついた。…それ以上に何故女に見えるのかが気になるがな。

「妖夢さん。彼は光ですよ」

七実さんが助け船を出してくれた。七実さんが言ったことで妖夢は刀を仕舞った。危ない奴だな。

その後、妖夢に謝られてどうしようもなくなったりした。

「しかし、何で女と間違われたんですかね？」

間違えを正してくれた七実さんに聞いてみた。

「ああ、それはね。髪がかなり長いからよ。女性に見えるかもしれない位にね」

……ああ、ラジオで死にかけた時に細胞を活性化させて回復させてたので、髪とかも伸びたのだろうか。だとしたら、面倒だな。死にかけた時に回復させる方法を変えないといけないからな。

「そういえば、何処に行くつもりなんだ？」

冥界在住の人々が早々冥界をでないと思うし。

「それはねえ。神社で宴会をするからよ」

ナイトキャップに近いものをかぶりピンク色の髪で和服を着た女性が答えた。

「……誰？」

正直な感想だ。向かっている先は分かったが、誰なんだろう。

「この方は、白玉楼の主の西行幽々子様ですよ」

妖夢がさらつと答えてくれた。あの時、幽々様が呼んでいるとか言ってたな。

「よろしくねえ」

笑顔で言われた。俺も自己紹介した方が良いんだろうか。

「宴会があるのは異変が解決したからなのか」

「ええ、魔理沙さんがそう言っていました。幕の後ろに何か 誰か乗っていましたね」

「多分、それ俺だと思う」

魔理沙が運んでいるのか。魔理沙はどこを通って白玉楼についたのだろうか。途中で見かけたなら如何にかして欲しかった。

多分、今の俺は四分の三で構成されていると思う。残りは、体の中にあるかな。あればいいな。

無かったら霊とか入り込みそうだし例えば、銀魂のスタンドとかなんかその辺の霊とか。

まあ、そのまま神社に向かって移動することになったけど、途中

で幽霊に会った時に妖夢が楼観剣と言う剣で幽霊をどんどん斬っていた時楽しそうにしてたのは中毒だからなのだろうか。そうでないこと切に願う。

そんな調子で進んで行くと、幻想郷自体を見渡せそうな所まで来ていた。その近くにポツンとそう言った方が良さそうな神社があり、そんな場所にあるのになぜかそれなりに人が居た。否、人外もいた。むしろ、人の方が少ない。そんな場所だった。俺も一概に人かどうか怪しくなってきたが、主に霊体化で。

まあ、俺がそんなことを考えている間に妖夢たちは降りていたので、俺も降りた。

21話 裁判の後にまた冥界（後書き）

感想などがありましたらよろしく願いします

22話 何だかんだでグダグダするのがこの小説（前書き）

酒を飲むなら飲まれるな。それが、酒を飲む人のルールです。

22話 何だかんだでグダグダするのがこの小説

俺は、宴会会場である神社に到着した。

と言っても、さつきからいたような感じだな。

まあ、着地した後、冥界メンバーが集まっていた場所に向かった。向かう前に、霊夢に捕まった。

「何で、此処に居んのよ」

まさかの言葉だった。そして、俺は否定されているような感じが。

「俺が、此処に居たらおかしいのか？」

「あそこに居るのに居るからおかしいんですよ」

そう言いながら指を…指を指しながら言った。

指された方向を見てみると魔理沙が枝で俺の体突き抜いていた。

「お前は何してんだ」

俺は近づきながら言った。

魔理沙は俺の声が後ろから来ると思わなかったようで、驚いていた。た。

そんなに驚くことか？

「何って、見ればわかるだろ？棒で突っ突いていたんだ」

「何の嫌がらせだ？」

気絶もしくは品詞の人間にやる事じゃないと思うんだが。ああ、半分は人間じゃない俺。

「そつえば、魔理沙がここまで運んだのか？」

「ん、そうだけ。あそこにいた中でもっとも人を楽に運べそうなのが私だったからな」

「その割には行きよりも雑だったらしいけどな」

そう言つと魔理沙は顔は逸らしてなかったけど、目を確実にそらしていた。

それを見て俺は、追撃を仕掛けようと思ったのでやろうとしたら

後ろの方から

「此処に居ましたか。でしたら、あの時の続きをしましょうか」

そんな声が聞こえた。俺はその声の聞こえた方向に恐る恐る振り向くと、閻魔様がいた。

「な…な、なんでいつですか？」

「パニックになりすぎて意味が伝わらないぜ」

「………なんでいるんですか？」

「なんで居るのかと言われても…私がここに居たら問題が有るとでも言うのですか」

うん…口で元々勝てる気はしなかったが面倒だぞ。なら、どうする。逃げる通してもどうやって逃げる？実力差はかなり広い。気を逸らして逃げるしかない。

「あつ！！あそこに空飛ぶメイドが！！」

今だ！！

魔理沙と閻魔様が今俺から見て後ろの方に指を差し視線が向こうを向いている間に走る。

「そんなの結構目撃してるぜ…って、おい！！」

魔理沙が俺が逃亡したことに気付いたらしく、説教をするためか飛んで追いかけてきた。

足止めをするためか、弾幕を撃ってくる。今は避けなくてもいい位だが、当たれば即座に追いつかれて説教と弾幕が待っているだろうから、逃げ切るしかない。…あれ？自業自得？いやいや、そんなはずは、そんなはずない訳でもない。逃げ切れるか？否、逃げ切れない。神社の前にある階段を一気に駆け下りながら後ろから迫りくる弾幕を避け切るっ！…無理だった。後ろを向かずに後ろからくる弾幕を避け切るなんてそう簡単にいかないし、上手くいつても何回も出来るとは限らない。俺は、後ろから来た弾幕の一つが背中に当たり階段を転がり落ちた。思いつき死ぬかと思った。

幽霊だから死なないという訳あるはずない。この状態…幽霊でも五感はある。味覚は分からないが。当然、体力 霊体だと霊力が

？ もある。

まあ、間違えたら死ぬ。隙さえあれば逃げられるけどその隙がない。

「何しているのかしら。あなた達は」

そんな声が後ろから聞こえた。俺は、後ろを見るとどこかで見たことのあるメイドが居た。うん、一人しか知らないけど。

「えっと、咲夜さんだっけ」

「私の名前をあなたに言っただけ記憶がないんだけど」

「霊夢から聞いた」

どうやらそれで納得したらしい。

「私の話は聞かないくせに気楽でいいですね。あなたとはしっかりO H A N A S Iをする必要がありますね」

「今のお話って発言方法おかしくなかった？ 気のせいじゃないよね。絶対違うよね。意思疎通じゃなくて殴ったりする方だよな。閻魔様」

「ふざけているのですか…それと、私にも四季映姫・ヤマザナドゥと言っ名前があります」

「絶対後半は名前じゃない」

さてさて、時間も稼いだので逃げますか。俺はそう思い、能力で距離をなくして肉体に入りこんだ。

その一瞬あった浮遊感が無くなり、自分の周りに何か…感覚的には全身タイツみたいなくっ付いているような感じがあった。二回目だけど慣れないな…慣れたら駄目なんだろうけど。

俺は即座に起き上がり、さっき走って行った階段とは逆の方へ走り出した。が、それは途中で止められた。無駄に高い身体能力で一気に駆けようとしたが…したが、急にエルボーを食らった。食らう前に技の名前みたいのが聞こえたが今の俺には技を食らった痛みの方が辛い。

急に攻撃してきたのは、誰なんだ。

「何処に行こうとしてるのさあ」。今日は宴会だよ」

酔っている。完全に酔っている。しかも、幼女。あと角が生えている…角！？なんで角が生えているのさ。

「ほら、飲んだ。飲んだ」

絡み酒とは…面倒だ…だから誰なんだ、こいつは？よくよく見ればさ知らない人ばかり。

知っている人だけだと、冥界組

幽々子さんが大量に食

べて妖夢が料理を持ってきて七実さんがそれを見ている。見ていて平和だなあ、あそこは。

次、永遠亭は、鈴仙がてゐを追いかけている。で、ニートと妹紅が上空で弾幕ごっこ、永琳と誰かが喋っている。その誰かの特徴は銀髪、青っぱい服を着ていて、あとなんかこう…羽？の付いた帽子をかぶっていた。

他、咲夜さん所、羽の生えている水色の髪の少女の近くで待機中。その少女がこちらを見ているが俺は目を合わせてはいけない。その近くに金髪で変わった羽を持った少女が居る。その羽で飛べるの？その近くでチャイナ服を着て寝ている人もいる。…人じゃないんだろうなあ。ここにどれだけ純粋な人間がいるのだろうか。多分二桁ないと思う。

後は、霊夢の所に取材している人もいる。取材しているけど、その取材内容を幻想郷で伝えられるのか？

メデイスンと幽香さんも何か話し込んでいる。多分、花についてだろう。

隣りに居る幼女が飲めと言ってさつきから五月蠅いので盃を取ってきたら酒を注いでくれた。

「なあ、あんたの名前は何なんだ？」

俺はそう尋ねながら、酒を口に含んだ。

「あたしの名前は伊吹萃香。地上に居る最後の鬼だよ」

鬼…鬼？鬼って桃太郎や金太郎などで出て来るあの鬼だろう。鬼って、こんな感じなんだな。

そう思いながら、つがれていた酒を飲みこんだ。

その後の事は特に覚えていない。萃香に、結構飲んだねと言われたがなんだったんだろう？
宴会の片付けならすっかりしましたよ。ほぼ一人でね…

22話 何だかんだでグダグダするのがこの小説（後書き）

感想などがありましたらよろしく願いします

23話 後片付けと目的地へ（前書き）

二次ファンよ……私は帰って来……ごめんなさい。調子に乗りました
テストが数日後なのに投稿。反省はしている、後悔はしてない

今までのあらすじ

宴会で酒を飲みまくってました。

23話 後片付けと目的地へ

俺はせつせと働いていた。

理由は特にないが働いていた。と言うか、働かないと許しそうになかった。

霊夢がこちらを思いつ切り睨んでいる。

俺が一体何をしたというのだ。

「飲み過ぎ、食べ過ぎ、ソルム」それ以上はアウトだ」……」

という事らしい。俺はため息をつきながら、昨日の宴会の片付けをしていた。

嘘くさい。記憶にないし、誰か知っている人が居たら教えてくれ。人じゃなくてもいいから。

そんなことを思いながら、宴会で使われた皿やコップを持ってそそくさと前もって言われていた台所に行って食器を洗っていた。

がしやがしやがしやがしやがしやがしやがしやがしやがし
やがしやがしやがしやがしやがしやがしやがしやがしやがし
やがしやがしやがしやがしやがしやがしやがしやがしやがし
やがしやがしやがしやがしやがしやがしやがしやがしやがし
やがしやがしやがしやがしやがしやがしやがしやがしやがし
やがしやがしやがしやがしやがしやがしやがしやがしやがし
やがしやがしやがしやがしやがしやがしやがしやがしやがし
やがしやがしやがしやがしやがしやがしやがしやがしやがし
やがしやがしや

ってどんだけあるんだ。さっきまでこんなになかったはずだぞ。

「追加持つて来たからよろしく」

霊夢はそう言いながら多分外にあつたであろう食器たちを置いて行った。

…あれ？これで増えているの？そう思ったので俺は洗うのを一回

止めて外を見に行つた。外にあつた食器はあつた様子もなくただ、参拝客の居ない閑古鳥も鳴かないであろう神社であつた。

「何か言つたかしら？」

「イイエ、ナニモイツテマセン」

事実、俺はないも言つてはいない。ただ単に思つただけだ。それでも奴はそれに気付くというのか。それなんてニュータイプ？

「じゃ、まだ皿洗いあるから行きますね」

そう言い残して来た方向に向かつて歩いて行つた。

長かつた…ああ、長かつた…長かつた。

どこかで見たような俳句だつて？俳句じゃなくて、思つたことを吐き出した結果だよ。つまり、朝からやって昼過ぎに終わった。皿洗いだけで。おかげで手が、しわのない所を探すのができない位になつている。

「なあ、霊夢？」

「うん？何？」

「俺つてさあ？最初は人里に行こうとしてたよな。まあ、何だかんだでついて行く事になつたけど人里へ行く道を教えて貰つてないんだが…おい、顔をこつちに向ける」

「忘れていたわ」

「予想以上にあつさり言つた！！」

そんな会話をしながら、俺たちは今、まったり休憩中なのである。まあ、霊夢は俺が休む前から休んでいたけど。

「それで、どうやって行けばいいんだ？」

「そうねえ、なんか向こうの方に進んで行けば行ける筈よ」

最低限その方向に対して指くらい指してもらいたい。お茶を飲みながら言われると異常にむかつくのは何故だろう？

そんなことを考えながら隣に置いてある煎餅に手を出したが、なにもなかった。

はて？さっきまであつた筈なのに、大体八枚くらいはあつた。

「霊夢？煎餅たくさん食べた？」

霊夢は俺の方を見てこいつは何を言っているんだろ？みたいな顔をしてから、煎餅があつた場所を見て無くなっていることに気がついた。

「なに食べきつてるのよ」

「俺の性にするつもりか！」

軽く恐ろしいことを言ってくれるもんだ。無くなっているから食べたかと聞いたら俺が知らないうちに食べていたという事になっていた。霊夢、怖い子。

「まあ、冗談は置いといて」

「声色が冗談に聞こえなかったがな」

「誰にも気付かれずにせんべいを取ることが出来そうなのならいるわよ」

「なんでもありだな此処は」

空飛ぶ巫女さん、普通の魔法使い、完全に瀟洒なメイド、半人半霊の庭師、華胥の亡霊とかいるんだから、これ以上増えても何とも思わな……なくもない。个性的すぎるだろう？と考えても。

「それで犯人は誰なのですか、霊夢さん」

「犯人の特徴は、空間を移動できて、異空間の中に住んでるのよ」

「先生、その特徴だといまいち分かり切りません。と言うかその犯人自体あつたことが無いのでわかりません」

俺は、事実を言っているし空間を移動できるってなんなんだ？俺が飛ぶ時みたいに移動するのか？それとも、どこぞのまほう使いみたいに空間に穴をあけて移動するのか。…空間に穴か……頑張ればできそうな気がする。やらないけど。

「まあ、犯人はスキマ妖怪よ」

「いや、だから誰だよ。その物と物の間に居そうな妖怪は」

スキマ妖怪と言われてもどんな妖怪かわからない。スキマと言われると家具と家具の間で掃除がしにくい事が思いつく。…スキマ…

…家具の間……掃除……埃

「埃みたいな妖怪なのか」

「誰が埃なのかしら」

少し怒っているような声が後ろから聞こえその直後俺の後頭部の上から棒状の何かが叩き付けられた。

叩き付けられて、俺はその叩き付かれた勢いで縁側から転がり落ちて一回転して叩き付けた人物を確認しようとする前にさっきまで持っていた湯呑からまだ残っていたお茶が俺にかかった。

「熱ッ！！」

殆ど服にかかったためそこまで被害は多くなかったが熱いものは熱い。

軽く服を乾かすために扇ぐ…いや違うな…まあ、その服を乾かしているという事でおk？

「誰だ、あんた」

金髪、和服、ナイトキャップのような帽子をかぶり傘を持っている女性がいた。

あれが、霊夢が言っていたスキマ妖怪なのだろう。

確かに空間移動が出来るようだ。じゃなければこの参拝客の居ない神社にタイミングよく居るはずがない。

「やっぱり、紫だったのね」

やはり霊夢とスキマ妖怪 紫 何処となく取りつく所がない訳ではないがどこかであった事が有りそうな感覚がする。多分それは、何処となく胡散臭く感じるからだろう。

俺は、やはり彼女に似た人物にあったことがあるのだろう。だが、俺はそんな気がするだけであつたこともないのかもしれない。まあ、戯言だな。

「いえ、私は食べてないわよ」

まさかの発言だった。つまり彼女以外で犯人はいるという事になる。

しかも彼女と似たような能力を持っているという事になる。

「そうじゃなくって、あなた達が普通に食べきっていたというだけ

の話よ」

つまり、彼女は煎餅がどうのここの言いあつ前から俺達を、もしくは霊夢か俺を見ていたという事だ。

さつき霊夢は異空間の中に居ると言っていた。それが表わすことは異空間の中から移動や空間に穴をあけてそのあけた場所からその様子を見ることが出来るという事だ。そこら辺から導き出せる彼女の能力は空間に干渉するものだろうか。しかし、少しだけ気になることがある。俺は、彼女の今持っている傘で後頭部を攻撃された。あまり関係ないかもしれないが最近…幻想郷^{こゝろ}に来てから体が頑丈になっているのにあの傘は、曲がってもいない。不思議な傘だ。

「そこはもう少し突っ込むところじゃないかしら」

どうやら心も読めるらしい。まさか、心の隙間を覗くことが出来るからか。それならスキマ妖怪と呼ばれてもおかしくないな。

「どう考えてもおかしいでしょ」

「それで、一体何の用なの？」

スキマ妖怪が独り言のように呟いているのを見るのに飽きたのか霊夢が質問した。

その質問が来る事が分かっていたかのように胡散臭い笑みを浮かべながら答えた。

「それは、彼を人里に連れて行くためよ」

どうやら、俺はやっと目的地に行けるらしい。

23話 後片付けと目的地へ（後書き）

感想などがありましたらお願いします

24話 戦闘シーンって細かく書かないと伝わりにくいが読者の想像が頑張ると

タイトル道理に戦闘だけどへおい。

今までのあらすじ

人里へ行けるようです。あと、片付け

24話 戦闘シーンって細かく書かないと伝わりにくいが読者の想像が頑張ると

今、俺は人里の近くで戦闘態勢に入っている。

理由？あのスキマ妖怪のせいだよ。人里に行けると思ったら落とされた。あれが、スキマ妖怪と言われる理由なんだろうと思いがら落ちていく。スキマのなかで大量の目に見られながらいたけど、あれに慣れたらなんとなく駄目になりそうだ。いろんな意味で。

そう思いながらいるとその空間にも終わりが来た。目に見られていた空間からさっきまで見ていた青い空が見えた。俺はさっきまでいた空間の出口がある上空を見るとリボンに両端を縛られたいような空間がリボンをほどこしながら……解かれながら閉じていくところだった。神社の方も俺が落ちた後はあやって空間を閉じたのかと、どうでもいいものに感心しながら、迫りくる地面に着地する準備をし始めた。

落ちた先は軽く戦場だった。いや、敵陣の中と言った方が良いよな気がする。

目の前だけでも、人の形を取っていないのが沢山いる。さらにその奥には、人里だと思われる場所が見える。多分だが、こいつ等は一里を襲おうとしているのか、ただ単純に集まっていたのかはよく分からないが、俺を敵と見ていることは確かなのでさっさとフルボッコにしてから先に進もうと思います。あれ？こんな性格してたっけ？まあ、今はいいけど。

基本的に虚刀流は徒手空手である。

つまり、

「体鍛えて、技の効率を良くしないとほとんど意味ねえんだよ！」
そんなことを言いながら、虚刀流に近い徒手空手で近くに居る奴らに回し蹴りを食らわせる。

一撃一撃に力を込めないと効果がないため本当に面倒である。ま

あ、その辺は半人半魔と言う今の所回復以外で効果を現した事の無い部分に頼っている。

後方には本当に頼りないと言える中身の有ったり無かったりする弾幕で牽制と攻撃している。特に中つてないので牽制になっている。手で攻撃を捌きながら脚で急所っぽい所に攻撃しているが、妖怪の急所ってどこなんだろうね。蟲っぽいのも居たりするし。まあ、蟲っぽいのは弾幕を普段より多く撃って殺す。蟲なんて消えればいいのになんていいるんだろうね。そんなことを思いながら近くに居る蟲以外の妖怪に攻撃していく。

さつきから、攻撃したり攻撃を対処するときに体を回転させているから、正直……気持ちわるうえぶ。

体を回転させるのをやめて懷から防御用のスペルを取り出し、それに攻撃を受けさせその隙間から弾幕を打ち込んでいる。一つ一つに回転を加える！敵に挟り込むように撃つんだ！！……誰に行っているんだろうか？

回転した後特有のふらつきから解放されたので、足に力を入れて地面を蹴り正面に居る妖怪Aの顔に踵落としを決めて、落とした足を軸にして右隣に居る妖怪Bの頭に回転しながら、また踵落としを顔に入れる。それを何回か繰り返していると一体一体がそれなりの距離を取り始めた。……団体行動取れるんだ、と関係ありそうで無い訳でもないと思えることを考えていると、

妖怪C、D、Eが襲ってきた

コマンド

……撃

特……

ス……ル

防御

………

..... コマンドー！！！仕事しろオオオオオ！！

これ変に読み間違えられるぞ！○撃って攻撃なのか？砲撃なのか？..... あ、自由に読み取ればいいのか。

ひかりの爆撃

ひかりは爆発した。

GAME OVER

..... いや、ねえよ！！確かにそう読み取れるかも知れないけど、それはねえよ！！それ以前にあって欲しくないわ！

爆撃って自分が爆発するの！？空中から爆発物を落とすことを爆撃っていうんじゃないのか？！

（もしくは空襲）

いらねえよそんな情報！誰だ今地味に付け加えたうえで思考に入って来たのは！！

（私だ）

「誰だよ！！」

（そんな事より前を見なくていいのか？）

「はあ？」

頭によく分からない声が響いてきてそれにツツコンでいたら、前方から妖怪C、Dが連係攻撃を仕掛けてきた。

一体目が薙いだ腕をしゃがみこんで攻撃を避け、その体勢から前方に突っ込み、二体目の攻撃範囲よりも内側に入り込みさつきまでの勢いを殺さずに右手による拳底を撃ち込む。そこから左手で殴る。後ろに居た妖怪Cが殴って来たので、体を右回転で反転することで攻撃を避けその流れで左足で頭を蹴る。

（クツツツ..... フハハハハハハ..... やられはせん。やらせはせんよ！！）

「五月蠅い」

（あ...ちよっ...ま）

また聞こえた声に対して能力で…あの、その、何だかんだで聞こえないようにした。

妖怪Eに対して膝蹴りを撃ち込んだ。

妖怪の群れを倒した

ひかりは経験値30手にい

気にしない。もう知らない。着信拒否にしてやる。電波状況0じやなくてマイナスにしてやる。

倒したの以外だと人里と逆の方へ行った。何があるんだ。何があったんだ人里の方に。

そんなことを思いながらだらだら移動中。

もう、なんでもありなんじゃないのか幻想郷^{こゝろ}は。世紀末に末期が居てもおかしくないだろう。

此処（幻想郷）になら、宇宙人、未来人、異世界人、超能力者が居てもおかしくはない。

………未来人、以外なら該当するのいるな。こんな感じで、

宇宙人 永遠亭

異世界人 多分該当するなら俺

超能力者 能力持ち全員

未来人 居たとしても此処にはいない

多分こんな感じであろう。此処に来てからそんなに経って無い筈なのに、なんかもう色々と諦めたな。

能力って何で決まるんだろうな。生まれや育ちが関係しているのだろうか。…考えるだけ無駄か。

そう思い一度考えることを止めて、今まであった奴らの事を考えてみた。

どういつもこいつも人の意見を聞かないんじゃないだろうか。聞いて

ている奴の方が少ない。いや、自分勝手だからこそ普通に居られるのだろうか。

ため息をつきながら俺は人里へと入った。……そう言えば住む所決めてないな。

24話 戦闘シーンって細かく書かないと伝わりにくいが読者の想像が頑張ると

感想などがありましたらよろしく願います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0578t/>

東方平凡録

2011年10月30日14時18分発行